

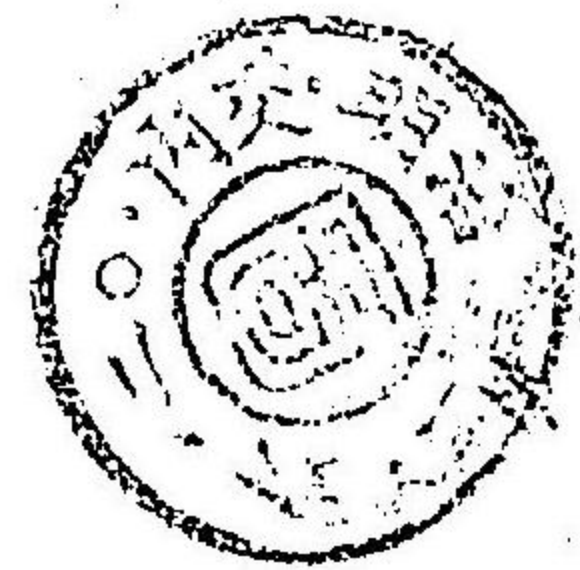
帝國憲法講義

完

204
430

特刊
6

法學士松村敏夫君著



帝國憲法講義

日本同盟法學會出版

自序

大日本帝國憲法ハ統治大權ノ行動ニシテ一定ノ軌道ニ由ラシメ帝國臣民ノ權利及財産ヲ貴重シ及之ヲ保護スルノ大典ナリ帝國臣民ハ此憲法ニ永遠ニ循行シ敢テ紛更ヲ試ミルコトヲ得ス然レトモ典憲ノ條規ヲ簡約ニシテ意義深遠初學者ヲシテ其要領ヲ辨識セシムルニ便ナラス而シテ坊間觀ル所ノ註疏解義ノ書多クハ法曹專攻ノ成績ニ非レハ粗笨ナル外國法理ノ翻譯ニ過キス是レ豈國家ノ進運ヲ扶持シ憲政ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルノ途ナランヤ立憲ノ美果ヲ收ムルハ廣ク國民ヲシテ自國ノ體制ヲ會得セシメ其參政ノ公

職ヲ全フセシムルニ在リ
 日本同盟法學會茲ニ觀ル所アリ余ニ憲法ノ通俗釋義
 ナ求ム余其志ヲ喜ヒ乃チ日常講學ノ餘録スル所ノ資
 料ニ就キ大憲ノ條章ヲ追ヒ極メテ平易ニ勉メテ通俗
 ニ之カ説明ヲ試ミ本書成ル然レトモ固ヨリ淺學ノ余
 果シテ讀者ノ希望ヲ満足セシムルヤ否ヤ深ク憂慮ニ
 堪ヘサルナリ若シ其レ之ヲ以テ聊カ我國體ノ美ヲ發
 揮シ我國民ノ率由スル所ニ知得セシムル一助トナレ
 ハ望外ノ幸ナリ

明治三十一年五月下浣

松村敏夫識

帝國憲法講義目次

◎緒論……………一

◎憲法……………一〇

◎第一章 天皇……………一二

◎第二章 臣民權利義務……………四四

◎第三章 帝國議會……………七〇

◎第四章 國務大臣及樞密顧問……………一一九

◎第五章 司法……………一二九

◎第六章 會計……………一四三

◎第七章 補則……………一七〇

帝國憲法講義

法學士 松村敏夫著

緒論

治國ノ要ハ秩序ナリ
 秩序ハ法ニ依テ維持セラレ憲法ハ實ニ治國ノ大
 法國家秩序ノ淵源ナリ
 國家トハ國土ト臣民トヲ基礎トシ唯一ノ主權
 之ヲ統治スルノ團體ナリ
 大日本帝國ハ 天皇之ヲ統治ス大日本帝國
 ハ即チ統治ノ客體ナリ
 統治權ノ客體ヲ爲スモノハ國土及ヒ臣民ナリ
 統治權ハ專ラ人ニ對シテ行ハル、モノニシテ物件ニ對シテ直接ニ行
 ハル、モノニアラス然レヒ人ニ對スル直接ノ作用ト國土ニ對スル作
 用トヲ區別シ元素トシテ論スル必要アリ

帝國ト言フ語ハ地理學上ノ國土ト臣民トヲ合シタル語ニアラス公法上ニ於ケル領土ト臣民トヲ合シテ帝國トハ言フナリ國土ハ其物自身ニ於テ統治ノ客体ナリ臣民ハ臣民タル資格ニ於テ客体ヲ爲ス例セハ日本臣民ハ外國ニ在住スルモ尙ホ日本臣民タルカ如シ

因之觀之國土ハ國家成立ノ靜的要素ニシテ臣民ハ國家成立ノ動的要素ナリ國土臣民ハ共ニ相對シテ統治ノ客体タルモノナリ大日本帝國ノ國土ハ帝國統治權ノ及フ區域ヲ指ス國土トハ一定ノ權力ノ下ニ立ツ一定ノ土地ヲ指示スルモノナリ即チ帝國ノ國土内ニ於テハ總テ外國ノ權力ヲ排斥ス獨リ外國ノ權力ヲ排斥スルノミナラス一定ノ國土内ニ二個ノ權力同時ニ行ハル、コヲ許サル、モノナリ往時ニ於テハ主權ノ國土ニ對スルノ關係ヲ以テ普通ノ所有權ト同視シ普通所有權ノ上ニ尙ホ一層大ナル所有權アリト稱シ私人ノ所有權ヲ劣等ノ所有

權ト稱シタリキ然レモ所有權ハ國法ノ設定ニ係ル私權ニシテ統治權ハ國法ノ源泉ナルカ故ニ二者全ク其性質ヲ異ニス領土權ハ權力ノ關係ニシテ財産ノ關係ニアラサルナリ故ニ全國ヲ舉ゲテ他人ノ所有ニ販スルモ尙ホ領土權ハ存スルナリ又外國ニ於テ帝國カ土地ヲ購入スルモ其ハ所有權アルモ領土權ヲキナリ完全ナル所有權ト完全ナル領土權トハ同一ノ物ノ上ニ行ハレテ相牴觸スル所ヲキナリ

學者ノ領土權ニ關スル主タル論說ハ國土ハ國權ノ行ハル、區域ヲ指示スル標準ナリト言フニ在リ即チ統治權ノ客体ハ國土ニアラスシテ臣民ノミナリト言フニ在リ然レモ領土權ハ對人權ト對峙シテ獨立スルモノナリ例ヘハ國家カ或土地ヲ其領土ト定ムルモ其ハ假令臣民ノ之レニ居住スル莫シト雖モ尙ホ其土地ノ上ニ統治權ヲ行使シ得ルカ如シ之レニ反シテ統治權ノ客体ハ臣民ノミナリトナス者ハ外國ニ在ル

日本臣民ハ即チ統治權ノ範圍ヲ脱シタルモノナリト論結セサルヲ得サルナリ而シテ所謂臣民トハ前屢々述フルカ如ク國土ト相對シテ統治ノ客体タルモノニシテ國家ト個人トノ關係ハ權力關係ナリ國家ニ對シテ絶對無限ニ服従スル者タルノ資格ナリ吾人ハ國家ノ臣民アリテ而シテ後チニ成立シタルモノナルコトヲ忘ル可ラス然ラハ臣民ハ國家成立ノ要素ニシテ臣民タルノ資格特質ハ國家ノ制定物タル法律以前ニ於テ確定セサルモノナルコト毫モ疑フ可キニアラサルナリ從テ臣民タルノ資格ヲ法律ニ求ムルハ誤謬ノ甚シキモノニシテ唯タ之レカ例外トモ見ル可キモノハ歸化ノ一アルノミ

臣民ハ帝國ノ範圍内ニ居住スルカ故ニ臣民タルニアラスシテ別ニ境土主權ノ外臣民ニ對スル國權ノ作用アリ臣民タル資格ハ帝國ノ國土内ニ在ルト否トニ係ハラス別ニ存在スルモノナリ臣民タルノ資格ハ

國家ニ服従スルニ在リ外國人ハ日本臣民ニ非ス故ニ日本ノ版土内ニ在ル外國人ハ臣民タルノ資格ニ於テ統治セラル、ニアラスシテ帝國ノ領土ニ在ルトノ條件ニ因ルモノナリ從テ我版土ヲ脱スルト同時ニ全ク國權ノ作用ヲ蒙ラス

然ルニ列國ノ親交益々増進スルニ從ヒ臣民ト外國人トノ間ニ法律上ノ保護ノ差異漸ク減少シ爲メニ主權ニ服従スルノ一事ヲ以テ臣民ト外國人トヲ區別スル能ハストナシ臣民トハ外國人ノ有セサル特別ノ權利義務ヲ享有スル者ノ資格ナリト論スルモノアリト雖モ臣民タルノ資格ハ法律ノ制定物ニ非ス臣民ノ特別ナル權義ハ臣民ノ要素ニアラサルナリ居留外人ハ本國政府ニ絶對ニ服従スルモノナリ我主權ニ服従スルハ國土ノ關係ナリ臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ臣民タルニアラス臣民タルカ故ニ法律ニ服従ス法律ニ服従スルニ由リテ權利ノ享

有テ全フス日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ由ルトハ臣民籍ノ得喪ハ法律ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ宣言スルモノニシテ國家ト臣民トノ服從關係ハ法律ニ基キテ生スルヲ言フニアラサルナリ國權ハ臣民籍ノ何タルヲ問ハス凡テ其領土内ニ在ル者ニ及フ然レモ完全ナル服從ト完全ナル權利ノ享有トハ臣民タル身分ニ伴隨スルヲ以テ臣民タル資格ノ存否ハ大ヒニ其權能ニ關ス故ニ法律ハ日本臣民タルノ資格ヲ定メ外國人ト區別スルノ準則ヲ示スモノナリ而シテ從來學者カ一個人カ臣民トシテ享有スル總テノ權利ヲ總稱シテ臣民權ト稱セシハ茲ニ所謂臣民タルノ要件トハ異ナレリ一個人カ享有スル權利ノ計ハ臣民權トシテ統治ノ客体ヲ成スモノニアラス權利其モノカ統治ノ客体タルニアラスシテ權利ヲ有スルノ主体其者カ即チ統治ノ客体タルナリ民法學者ハ時トシテ臣民ニ二個ノ臣民資格アリト説クモノ

アリト雖モ此ハ外國ノ國法ニ比シテ論スルモノナリ公法上外國法ハ法律ニアラサルヲ以テ外國法ニ於テ外國臣民タルノ資格ハ公法上之ヲ問ハサルナリ故ニ我國臣民ナルカ否ヲサルカノ二ツヲ決スルヲ以テ公法ノ問題トス一人ニシテ二主權ノ下ニ立チテ統治ノ客体タルヲ認メサルハ我國法ナリ

以上論スル所ヲ以テ國家ノ性質及ヒ國家構成ノ元素并ニ元素ノ地位ヲ闡明シタリ而シテ今又學者ノ説ニ依レハ國家アレハ憲法無ラサルナシト故ニ步武ヲ進メテ憲法ノ何タルヤヲ説明セサル可ラス之レ殊ニ本書ノ目的ナリ然レモ一國ノ憲法ハ先ツ其國體ニ依テ憲法ノ方針ヲ異ニスルモノナリ國體ハ歴史ニ依テ其基ヲ固フス依テ敢テ歴史ヲ謹按シテ國體ノ精華ヲ知ラサル可ラス

抑モ我輩國三千年ノ丕基ハ遠ク己ニ神世ニ定マリ治者被治者ノ分界

肅然トシテ動カス可ラス我固有ノ國體ハ之ヲ祖先敎ニ芽發シタルヤ明クシ祖先敎トハ祖先ヲ崇拜スルノ大義ヲ謂フモノニシテ日本固有ノ體制ハ實ニ血統ノ團體ナルナリ血統團體トハ其同始祖ヲ敬愛スルニ據リテ共ニ社會ニ存シ祖先ノ威力ニ服從シ以テ平和ノ秩序ヲ維持スルモノヲ謂フ平和ノ維持ハ秩序ノ始ニシテ或ハ家ヲ成シ或ハ國ヲ成シ終ニ國民存立ノ基礎ヲ堅フシ忠君愛民ノ正道ヲ保持シ茲ニ國家存在ヲ自覺シ之ヲ千古ニ建テ之ヲ万世ニ傳フ之レ皆ナ祖先ヲ崇拜スルノ大義ニ基ク而シテ血統ハ之ヲ祖先ニ受ケ之ヲ子孫ニ傳フ故ニ其團體ハ永久ナリ蓋シ利害ヲ以テ集リ協和ヲ以テ維クノ團體ハ又利害ヲ以テ散シ協和ヲ以テ弛フハ誠ニ天數地則ノ免レサル所ナリ血族相依籍スルハ自然ノ團體ニシテ父母ノ子孫ヲ愛シ子孫ノ父母ニ戀ナルハ實ニ天然ノ建鎖ナリ幽玄其本ヲ極ムルニ由ナシト雖モ之レ社會成

立ノ初メニシテ國家構成ノ基本タルモノナリ血統團體ニ創マリタルノ家國ニシテ家ノ至長ハ家長ナリ家長ハ祖先ノ威靈ヲ代表シ家族ニ對シテ家長權ヲ行フ國ノ主宰ハ天皇ナリ天皇ハ天祖ノ威靈ヲ承繼シ國民ニ對シテ統治權ヲ行フ家長權ト統治權トハ君父カ其祖先ヲ敬愛スル子孫ヲ祖先ノ威靈ニ代ハリテ保護スルノ權力ナルナリ而シテ吾人ノ祖先ハ即チ畏モ我天祖ナリ天祖ハ國民ノ始祖ニシテ皇室ハ國民ノ宗家タリ一家ノ祖先尙ホ拜ス可シ況ンヤ一國ノ始祖ヲ拜セサルヲ得ンヤ皇位ハ天祖ノ威靈ニシテ天皇ハ現世ニ在ルノ天祖ナリ天祖ノ遺志ニ適從シ服從シ以テ我國體ヲ維持スルハ臣民ノ正ニ盡ス可キノ大本タルト同時ニ建國主宰ノ權力ナルナリ此權力ニ保護モテレ以テ國體ノ精華ヲ維持ス可キナリ是レ我國不磨ノ大則ニシテ我國體ノ万邦ニ殊絶スルノ美風ナリ

然リ而シテ世人或ハ國体ト政体トヲ混同スル者アリト雖モ國体ハ主權ノ所在ニ依テ定マリ政体ハ主權ノ行動ニ依テ定マル主權天皇ニ在ルノ國体ハ君主制ノ國体ニシテ否ラサルモノハ非君主制ノ國体ナリ主權ノ行動獨裁專制ニ出ツルモノハ獨裁專制ノ政体ニシテ一定ノ憲法ニ循ヒ君主ノ統治スル政体ハ立憲君主ノ政体ナリ而シテ政体ノ分類ハ共和アリ單純アリ一々叙述スルハ無用ナリ故ニ先ツ我政体ハ立憲君主政体ナルヲ承知スルヲ以テ足ラシ政体ノ異動ハ憲法ニ因テ定マル一律永遠ニアラサルナリ

憲法

憲法ハ國家統治ノ大本ニシテ國權ノ本体ト行用トノ大綱ヲ規律ス而シテ汎ク憲法ト言フキハ唯々成文憲法ノ條章ノミヲ指スモノニアラ

スシテ苟モ國家統治權運用ノ綱領ヲ規律スルモノハ其性質ノ正ク憲法ニ屬ス可キモノニシテ其名稱ノ如何ニ關セサルモノトス而シテ今ヨリ正ニ闡明解陳セントスル憲法トハ明治二十二年二月十一日ヲ以テ發布セラレタル七章七十六條ノ明條ヲ指スニ外ナラス講學上形式憲法ト稱スルモノ是ナリ

現今歐洲大陸諸邦ノ立憲制度ハ多クハ革命大亂ノ餘ニ出ツル者ナリ革命騷亂ノ餘ニ出テタル憲法ハ概テ舊國体ヲ亡ホシテ新國体ヲ興スモノナリト雖モ我憲法ハ憲法制定ト同時ニ舊國体ヲ廢シテ新國体ヲ起スモノニアラサルナリ明治憲法ノ制定ハ憲法發布ノ詔勅ニモ曰フ如ク國家ノ進運ヲ扶持セシメトシ望ミ乃チ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ廢踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ云々ト又告文ニ誓宣スル所ヲ仰クニ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ云々皇祖皇

宗ノ皇裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス云々ト因之觀之世局ノ進運ニ方リ人文ノ發達ニ循ヒ之レテ成文ニ昭示シタルニ過キス我千万年ノ國體ハ尙ホ昭々トシテ維持セラル、モノタルコト一ノ疑フ可キ所ナシ要之我憲法ハ畏クモ天皇陛下ノ親裁マシマセラル欽定憲法ニシテ舊國體ヲ變廢スルモノニアラス憲法ノ制定ニ因テ益其丕基ヲ鞏固ニシタルニ在リ

第一章 天皇

天皇トハ國法上ノ名稱ニシテ萬世一系ノ大統ヲ承ケサセ給ヘル我國家ノ主体ニ對シ奉ルノ尊稱ナリ我國ノ主權ハ 天皇ノ總攬在シマス所ニシテ 天皇ハ皇位ニ在テ統治シ給フモノナリ皇位ハ憲法ノ制定ニ由リテ之レヲ得ルモノニ非ス特ニ憲法ノ條章ニ

明揭スルモノハ我固有ノ國體ハ益々憲法ニ由リテ鞏固ナルコトヲ示スモノナリ

大寶令ニ依ルニ天子ハ祭祀ニ稱スル所天皇ハ詔書ニ稱スル所、皇帝ハ華夷ニ稱スル所陛下ハ上表ニ稱スル所ト在リ然レモ天子ト曰ヒ天皇ト曰ヒ皇帝ト曰ヒ陛下ト曰ヒ元首ト曰ヒ君主ト曰フモ我國ノ主權者ニシテ皇位ニ在リテ統治權ヲ總攬シ玉フ統治權ノ主体タルニ異ナルコトナキナリ

第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

本條ハ我國體ヲ示シ統治權ノ主体及ヒ客体ヲ明カニス
大日本帝國トハ統治權ノ客体ニシテ國土及ヒ臣民ヲ總稱ス抑モ國家トハ一定ノ土地ノミヲ指スモノニアラスシテ土地ト臣民トノ一要素ニ由テ構成セラレタル共同團體ヲ謂ナリ万世一系トハ神代天

皇ヨリ皇統連綿絶へサルノ意ニシテ永ク單一ノ國家ヲ爲ス可ク將來ニ於テ聯邦組織ト爲スヲ許サ、ルヲ謂フ之レヲ要スルニ本條ノ趣旨ハ我國ハ君主國體ニシテ 天皇ハ主權者ナリ統治ノ主体ナリ大日本帝國ハ統治ノ客体ニシテ 天皇ハ國土及臣民ヲ絶對無限ニ支配スト云フニ在リ國土ハ統治權ノ客体ナリ外國人ハ我國土ニ在ルニ由リテ我統治權ニ服従ス然ルニ憲法ハ一言ノ國土ニ及フナシ之レヲ外國ノ例ニ徵スルニ歐ノ或國ノ憲法(例ヘハ獨逸ノ如キ)ハ其領土ノ區域ヲ明記シ又將來領土ノ變更ハ別ニ憲法ノ變更又ハ法律ヲ要スト爲ス蓋シ憲法ノ行ハル、範圍ヲ定メシモノニシテ國土其物ニ關スル規定ニアラス何トナレハ國土ハ憲法又ハ法律以前ニ存在ス可シ憲法又ハ法律ニ依リ存在スルニアラサレハナリ

第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス

本條ハ皇位繼承ノヲ規定ス

皇位トハ最高無限ノ權力即チ統治權ノ所在ヲ謂フモノニシテ皇位繼承トハ何人カ權力者ナルカヲ示スモノナリ皇室典範ハ皇室ノ家法ニシテ憲法ハ天皇ハ男系ノ男子タルヲ要スルコトヲ保障ス憲法ハ王者不死ノ古諺ヲ法理トシ天皇ノ崩御即位ハ皇室ノ典例ニシテ法理ハ皇位ノ空虛ヲ認メス今帝ハ天祖ノ延長ニシテ歷代天皇ハ總テ一体ヲ爲ス若シ夫レ繼承ノ順序ニ至リテハ皇室典範第一條以下第八條ヲ參照ス可シ

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

本條ハ我國體ノ美ヲ表彰スルモノナリ

天皇ハ現世ニ在ルノ天祖ニシテ臣民ハ唯ニ天皇ニ服従スルノミ
ナラス之レヲ崇拜ス我國體ノ精華ハ國權ノ威力ノ制裁アルカ故ニ
違反スル能ハサルニアラスシテ精神上ノ先天的信向ハ忠君愛國ヲ
忘ル、コトヲ許サス
歐洲ノ學理ヲ祖述スル者多クハ本條ヲ解釋シテ之レ天皇ハ法律ノ
外ニ在リ王ハ不善ヲ爲サストノ意ナリト言フト雖モ非ナリ統治權
ノ主体タル天皇ハ法ヲ作ルモノニシテ法ニ服従スルモノニアラサ
ルコトハ明瞭ナル事理ニシテ別ニ成條ヲ設クルノ要ナシ本條ハ万
能ナル天皇ハ天祖ノ威靈ヲ繼承シ臣民ノ信仰崇拜ヲ受クルコトヲ示
スモノナリ

第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ
憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ

本條ハ天皇統治權行使ノ形式ヲ示スモノナリ
元首トハ比喩的ノ詞ニシテ國家ヲ以テ人体ノ如ク比喩シタルナリ
首腦ハ人類ノ四肢五体ヲ支配スルカ如ク天皇ハ國家ノ首腦トナリ
テ總テ國權ノ行動ヲ統ヘ給フノ意ヲ明カニシタルナリ此憲法ノ條
規ニ依ルトハ己ニ憲法ヲ制定シタル以上ハ必ス此憲法ノ定ムル形
式ニ依リ統治權ヲ行使スルトノ意ニシテ之レ立憲政體ノ主タル限
目ナリ學者多ク之レヲ以テ憲法ハ君主ヲ制限スルモノナリト論ス
然トモ之レ憲法ヲ以テ君主ヨリ優勢ナリトスルモノニシテ君主カ
自己ノ意思ニ本キ制定シタル憲法カ君主ヲ制限スルトハ論理上ノ
矛盾ナリ憲法ハ唯天皇カ統治權ノ作用ニ向ツテ一定ノ形式ヲ示シ
タルニ過キスシテ二者ノ間ニ毫モ制限拘束ノ關係ナシ專制政治ニ
比シテ立憲政治ノ優レルハ後者ハ前者ノ如ク國家ノ意志カ屢變更

スルコトナリ常ニ一定ノ方向ニ向ヘルカ故ニ臣民ハ安シテ之レニ服従スルヲ得ト言フニ在ルノミ天皇ハ何時ニテモ國家危急ノ場合ニ其權力ノ作用ニ由リテ憲法ヲ破ルコトヲ得可シ唯々平時ハ之レヲ破ルコトヲ欲セサルノミ

第五條 天皇ハ帝國議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フ

本條ノ主意ハ立法權ノ所在及立法ノ手續ヲ規定シタルモノナリ之レヲ第三十七條ト對照スルニ總テ法律ヲ成スニハ帝國議會ノ協賛ヲ要スルモノニシテ協賛ナキノ法律ハ法律ニアラス而シテ立法權トハ法律ト稱スル一種ノ命令ヲ發スルノ權力ニシテ統治權ノ作用ノ一ナリ

協賛トハ帝國議會ノ議決ナリ議決ニ二種アリ一ハ協賛ニシテ一ハ承諾ナリ憲法ノ明文ニ依レハ法律案又ハ豫算案ニ對スル議決ハ之

レヲ稱シテ協賛ト謂ヒ法律ニ代ハル緊急勅令(第八條)又ハ財政上ノ非常處分(第七十條)ニ對スル議決ハ之レヲ稱シテ承諾ト謂フ協賛ト承諾トノ差異ハ協賛ハ効力ノ存セサルモノニ對シ効力ヲ有セシムル材料ヲ供スル行爲ニシテ承諾ハ効力ノ存スルモノニ對シ之レヲ持續セシムルノ行爲ナリトス

第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス

本條ハ法律ノ完成及臣民ノ遵行ヲ規定ス

法律ヲ裁可スルトハ法律ヲ作ルノ意ニシテ已ニ存在スル法律ノ上ニ裁可ヲ加フルノ義ニアラス法律ハ裁可ニ由リテ法律ノ形式ヲ具有ス唯ニ議會ノ議決アルト同時ニ法律トナスニアラス法律トナルハ天皇ノ裁可ヲ要ス公布トハ之レニ法律上ノ効果即チ檢束力ヲ與フルノ義ニシテ單ニ臣民ニ通知スルノ意ニアラス法律ハ裁可ヲ以

テ完成シ公布ヲ以テ臣民遵由ノ義務ヲ生ス公布ハ公文式ノ定ムル所ニ依リ行フモノナリ公文式ハ明治十九年勅令第一號ヲ以テ定ラレタリ同令ニ據レハ法律ノ施行期限ハ官報各府縣廳到達日數ノ後七日トス(改正法例第一條ハ法律ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス)然レモ固ヨリ公布當日ヨリノ施行及ヒ特別ノ施行期限ヲ設クルヲ妨ケス(公文式第十三條法例第一條但書憲法ハ法律ヲ裁可スルノ時限ニ關シ規定スル所ナシ此時限ハ裁可又ハ協賛ノ性質ニヨリ推論スルコトヲ得サルカ故ニ議院法ヲ以テ之ヲ補充セリ議院法第三十二條ニ依レハ兩議院ノ議決ヲ經テ奏上シタル議事ニシテ裁可セラル、モノハ次ノ會期マテニ公布セラル可シト規定セリ

第七條 天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其ノ開會閉會停會

及衆議院ノ解散ヲ命ス

本條ハ帝國議會ハ統治ノ機關ニシテ獨立ノ人格ヲ有セス 天皇ノ大權ヲ以テ其職務執行ニ一定ノ條規アラシムル爲メノ規定ナリ素ト之レ議院法ノ一部ナレ共唯改正ノ手續ヲ鄭重ニセシカ爲メニ憲法ニ載セタルモノナリ

一 召集(第四十一條參照)

天皇カ議會ヲ召集スルハ貴族院及衆議院ノ各個議員ニ對スルノ命令ニシテ議會ノ召集ト言フハ普通ノ慣稱ニシテ總議員ニ發シ選擇ヲ許サ、ルカ故ナリ召集令ハ案内狀ニシテ召集ノ月日及場所ヲ示ス

議會召集ハ必ス 天皇ノ勅諭ニ依ル議會自ラ會集スルハ憲法ノ認ムル所ニアラス其議決スル所總テ無効ナリ(歐洲ニ於テ君主又ハ攝

政ノ命令ヲ俟タスシテ議員ノ集會シタル例アリ又内閣カ國會ヲ召集スル場合ヲ規定シ或ハ攝政ノ定マテサル場合ニ於テ國會自集ノ權ヲ認ムルコトアリ議會ハ召集ニ依リテ成立ス故ニ兩議院同時ニ之ヲ行フ

二 開會

開會ハ議會カ職務ヲ行ヒ得ル時期ヲ指示スルモノニシテ其成立ヲ認ムル公ノ行爲ナリ(議院法第五條參照)

三 閉會

閉會ハ全ク議事ノ終結ニシテ會期ノ終リヲ告グルモノナリ(議院法第三十五條)

四 停會

停會ハ議事ヲ中止スルモノニシテ開期ヲ短縮スルニアラス停會後

ノ議事ハ以前ノ議事ニ繼續ス(議院法第三十三條第二項)

五 衆議院ノ解散

解散ハ議員ノ任期短縮ナリ各個議員ノ資格ヲ消滅セシムル處分ナリ之レヲ衆議院ノ解散ト言フ衆議院ノ成立ヲ要シ召集以前ニ解散ヲケレハナリ

貴族院ハ世襲議員多クレハ解散セス停會ヲ命ス(第四十四條議院法第三十四條)

以上五項ハ更テニ第三章ニ於テ補充再說ス可シ

第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス
此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ

若議會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ將來ニ向テ其効力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

本條ハ所謂緊急勅令ヲ發スルノ要件及ヒ手續ヲ規定セリ

緊急勅令ハ之レニ法律ニ代ハル勅令ト稱スルヲ正當トス緊急トハ其勅令ノ性質ニアラスシテ之レヲ發スル必要ノ動機ナリ緊急勅令ノ要件ハ左ノ如シ

- 一 公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲メ緊急ノ必要アルコト
- 二 議會閉會ノ場合タルコト
- 三 尋常勅令ヲ以テ命令シ得サル事件ナルコト是ナリ

一 緊急勅令トハ緊急ノ必要ニ迫リ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ

災厄ヲ避クルカ爲メノ處分ナレハ主トシテ多數ノ人ニ關スル消極的ノ非常行動ナレトモ之レ事實問題ニシテ 天皇ノ認定スル所ニ據リ議會ノ容喙ヲ許サス之ニ對シ詳細ノ説明ヲ與フル教科書アリト雖モ我憲法ニ於テハ議會審査ノ職分ハ此事實問題ニ及ハス大井ニ英國法ト法理ヲ異ニス

二 閉會中トハ前會期閉會又ハ解散ノ時ヨリ次會期開會迄ノ間ヲ謂フ(議院法第五條參照)

三 緊急命令ハ法律ヲ以テ規定スヘキ事項ニ對セサルヘカラス法律ヲ以テ規定スヘキ事項トハ憲法ノ條章ニ於テ法律ヲ以テスヘキコトヲ明言セルモノヲ謂フ例ヘハ第二章ニ規定セルモノ、如シ以上ノ緊急勅令ヲ發シタルトキハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ノ承諾ヲ求ムルコトヲ要ス若シ議會ニ於テ承諾ヲ爲サ、ルトキハ政府ハ將來

ニ向テ其効力ヲ失フコトヲ公布セサルヲ得ス此場合ニ於ケル帝國議會ノ議決ハ協賛ニアラスシテ承諾ナリ而シテ此緊急勅令ハ議會カ次ノ會期ニ於テ拒否シタルトハ其時ヨリ効力ヲ消失シ公布ニ由リテ臣民遵由ノ義務ヲ解ク議會ノ承諾ヲ求ムルハ責任解除ノ法理ニアラスシテ將來ニ對シ効力ヲ有セシム可キヤ否ヤニ在リ緊急勅令ハ合法命令ニシテ違憲命令ニアラス議會カ緊急命令ノ事實上ノ要件ヲ監査スルモ何等憲法上ノ權義ヲ生スルモノニアラス唯質問又ハ上奏ノ方法ニ依リ間接ニ彈劾セント欲スルノミ之レ前ニ予ガ法理カ英國ト異ナルト云フ所以ナリ議會之ヲ承諾セサルトハ即チ一院ニテモ承諾セサルトハ政府ハ勅令ヲ以テ其無効ヲ宣言セサル可ラス若シ承諾シタルトハ依然効力ヲ有スルノミニシテ決シテ勅令變シテ法律トナルニ非サルナリ

緊急勅令ハ又緊急勅令ヲ以テ廢止シ得ベシ此場合ニ於テハ二勅令共ニ議會ニ提出スルコトヲ要スルヤ此問題ヲ解釋スルニハ緊急勅令ヲ議會ニ提出スルハ將來ニ効力アラシムル爲メナスヤ否ヤニ在リ予ハ効力ヲ有セシメシカ爲メニ提出スルモノナレバ廢止シタル場合ハ之ヲ提出スルノ要ナシト思料ス

政府トハ國務各大臣ヨリナル大政輔弼ノ機關ニシテ統治ノ主体ニアラスシテ統治機關ノ一タリ政府ハ施政ノ機關ニシテ國權ヲ外部ニ對シテ行使スルノ職司ヲ有ス

第九條 天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシム但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス

本條ハ行政命令權ノ種類及範圍ヲ定メタルモノナリ
行政命令ニ二種アリ一ヲ執行命令トイヒ一ヲ獨立命令トイフ執行
命令トハ法律ヲ執行スル爲メノ命ニシテ其執行ヲ爲スニ付テノ方
法及ヒ其他ノ細節ヲ定メタルモノナリ通常法律ハ大綱ヲ掲クルモ
ノナレバ其綱目ノ如キハ執行命令ヲ以テ定ムルコトヲ得ベシ夫ノ各
種ノ法律ニ於ケル細則及ヒ施行規則ト稱スルモノ、類皆ナ之レニ
屬セリ獨立命令トハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ臣民ノ幸福ヲ増進ス
ル爲メニ發スル命令ナリ二者共ニ法律ノ曠缺ヲ補充スルモノニシ
テ法律ヲ變更スルヲ得ス
所謂公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スルトハ其ノ範
圍甚ダ廣クシテ凡ソ法律命令ヲ發スルハ如何ナル場合ト雖モ此目
的ノ爲メタルニアラサルハナシ故ニ獨立命令ハ如何ナル事件ノ爲

メニテモ之レヲ發スルコトヲ得ルガ如シト雖モ憲法中法律ヲ以テ
規定ス可キ旨ヲ定メタル事項ニ付テハ必ラス法律ヲ以テスルヲ要
シ假令其法律ノ未ダ存セザル場合タリト雖モ亦タ命令ヲ以テスル
コトヲ得サル可シ行政命令ハ之ヲ緊急命令ト區別スルコトヲ要ス
緊急勅令ハ常ニ 天皇ノ親裁ニ係ル所ニシテ法律ニ代ルモノナリ
本條ニ所謂命令ハ多クハ 天皇ノ親裁ニ係ルト雖モ又行政官府ニ
委任シテ之レヲ發スルコトヲ得ルナリ且ツ前ニ述フルガ如ク法律ヲ
補充スルモノニシテ法律ニ代ルノ効力ナシ而シテ命令ノ 天皇ノ
親裁ニ出ツルモノ之レヲ稱シテ勅令ト云ヒ 天皇ノ委任ニヨリテ
發セラルルモノ其官府ニ依リ閣令、省令、府縣令、等ノ名稱ヲ有ス

第十條 天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定
メ及文武官ヲ任免ス但シ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ

特例ヲ掲ケタルモノハ各々其ノ條項ニ依ル

本條ハ行政機關ノ組織官吏ノ任免及俸給ヲ定ムルハ 天皇ノ大權ナルヲ定メタルモノナリ

天皇ハ統治權ヲ總攬シ國家百般ノ政務ヲ親裁ス然レモ行政ノ事タル多岐多端固ヨリ一人ノ能ク堪フル所ニアラス是ヲ以テ行政權ノ主長タル 天皇ハ國家生存ノ目的ヲ達スル爲メ宜シキニ從テ行政ノ機關ヲ組織シ之ヲ行用シテ以テ國家ノ目的ヲ圓滿ナラシム而シテ國家ノ目的ハ一ナラス從テ機關ノ設ケ亦タ一ナル能ハス

官制ハ機關ノ種類及職權ノ範圍ヲ定ム官吏トハ任命ノ手續ニ依リ政務ヲ施行スヘキ義務アル一個人ノ特別ナル身分ナリ任命ハ政務ヲ施行セシムル爲メニ一人又ハ數人ニ委任スルノ方法ナリ罷免ハ官吏ノ身分ヲ剝奪スルノ命令ナリ官吏ノ俸給ハ私法上ノ報酬ニア

ラス一種ノ恩惠ナリ任官ハ 天皇大權ノ發動ナリ然リ而シテ臣民官吏タル身分ヲ得テ國家ノ事務ヲ處理セシニハ義勇專心以テ盡サザル可ラス然レモ衣食住ハ人類生存ノ爲メ一日モ缺ク可ラス且ツ官吏ハ体面ヲ汚損ス可ラス故ニ國家ハ其需用ヲ充タスカ爲メ官吏ニ一定ノ俸給ヲ賜フ任官ヲ以テ契約ノ一種トナシ俸給ヲ權利トナスハ我憲法ノ認ムル所ニ非サルナリ前己ニ陳フルカ如ク行政各部ノ組織及文武官ノ任免ハ 天皇ノ大權ニ屬シ勅令又ハ命令ニ依ルト雖モ特別ノ理由ヲ以テ憲法及法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ其ノ定ムル條項ニ依ラサル可ラス例ヘバ會計檢査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ定ムルカ如キ第七十二條第二項裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ定メ裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外免職セララルコトナキカ如シ第五十七條第二項第五十八條第二項

第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

本條及次條ハ兵馬ノ大權ヲ規定ス
兵力ハ外寇内亂ニ對シ國家ノ獨立ヲ防護スルノ要具ナリ 天皇ハ大元帥ニシテ陸海軍ヲ統率ス兵馬統一ハ大權ノ專握ニ屬シ帝國ノ戰鬪力ハ帷幄ノ大令ニ由リテ動作ス我邦古來ノ制度ヲ見ルニ征討ノ勞ハ 天皇必ラス之ヲ親カラス然ラザレバ皇子皇后之ニ代リ敢テ之ヲ臣民ニ委子給ハサリシカ中朝官ニ文武ヲ分チ特ニ將帥ヲ置キ偶々將帥征討ノ命ヲ辱フスルキハ即チ之レニ節刀ヲ授ケラレタリ是レ討伐ノ大權ヲ委任スルノ旨ニ出テタルモノナラン

第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム

本條ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ムルハ天皇ノ大權ナルトテ規定ス

編制權ハ軍隊艦隊ノ編成國防ノ設備ヲ定ムルノ大權ニシテ統帥權ノ行使ニ外ナラス常備兵ハ平時ノ戰鬪力ナリ帝國ノ兵力ハ常備後備國民ノ三軍ヨリ成リ常備軍ハ平時練習常ニ備ハル所タリ

第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ

締結ス

本條ハ國交ハ議會ノ干涉ヲ許サザルコトヲ規定ス
蓋シ外交ノ事タル機密ヲ要スルアリ敏速ノ尊フアリ政策ヲ施スアリ每事議會ノ意見ニ由リテ左右スベキ所ニ非ズ故ニ之ヲ 天皇ノ大權ニ歸ス宣戰ハ國交際ノ破裂ナリ宣戰ハ事實ニ依リ布告ニ依ラス日清戰役ハ宣戰ノ布告以前ニ於テ開戰アリキ
媾和ハ國交際ノ恢復ナリ一般ニ條約ニ依リ和親ヲ示ス
條約ハ國ト國トノ約束ナリ口頭ナルアリ書面ナルアリ公表ナルアリ

リテ一定セス條約ニハ通商條約、同盟條約、郵便電信條約、版權商標ニ關スル條約等種々ノ類アリ是ヲ以テ本條ニ諸般ノ條約トイフ條約ハ命令ニアラス國ト國トノ約束ナリ之レカ爲メニ檢束セラル、モノハ双方ノ國家ナリ内國臣民ニ對シテハ檢束ノ力ナシ何トナレハ臣民ヲ直接ニ檢束スルモノハ法令ニシテ臣民ハ條約ニ對シ三者ナリ主權者カ對手國ニ對シテ條約ノ履行ヲ全クセンガ爲メニ條約ノ履行ニ必要ナル法令ヲ國內ニ發シタルキハ臣民ハ之レヲ遵奉スルノ義務ヲ生ス

條約ハ元來公布スルヲ要セス公布ヲ以テ効力ヲ生スルニアラス例ヘハ秘密條約ノ如キ公布ナクシテ効力ヲ有スルカ如シ若シ條約ヲ履行スルニ法律命令ノ變更ヲ要スルキハ新タニ法律命令ヲ制定セサル可ラス臣民ハ其新タニ制定セラレタル法律命令ニ由リ初メテ遵奉ノ義務ヲ生スルモノナリ我國現行ノ慣例ヲ見ルニ條約ヲ公布スルヲ以テ式トナシ公布ヲ以テ恰モ効力ヲ有スル標目トナスカ如ク殊更テニ各種ノ法律ヲ制定スルノ煩勞ヲ避ケテ條約ノ公布其物ハ一種ノ命令ニシテ臣民ハ其命令ニ由リ遵奉義務ヲ生スルモノノ如シ然レモ之レ適正ノ處分ト信スル能ハス議會ハ遂ニ其職權ノ蹂躪ヲ訴フルニ至ルナルモシ

第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス

戒嚴ノ要件及効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム
本條ハ戰時又ハ事變ノ場合ニ於テ天皇ノ戒嚴ヲ宣告スルコトヲ明定シタルモノナリ
戒嚴トハ戰時若クハ事變ニ際シ兵備ヲ以テ全國若クハ一地方ヲ警戒スルモノニシテ其執行ハ專ラ軍務ニ屬ス戰時トハ外患若クハ内

亂アルニ際シ特ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ムルモノニシテ(明治十五年第卅七號布告)事變トハ未タ戰時ト爲スノ布告ナキモ外患又ハ内亂ノ如ク國家緊急ノ場合ニ於ケル非常急變ヲ云フ抑モ兵備ハ國家ノ公敵ニ對シ之ヲ爲スモノナレモ軍機ヲ保チ敵兵ノ進入ヲ防ク爲メニ必要トスル限リハ臣民ノ自由ヲ制限セシメ固ヨリ正當ノ事タラサル可ラス故ニ憲法上ノ臣民ノ自由ヲ制限シ又ハ警察權司法權ノ全部若クハ一部ヲ軍隊司令權ニ移ス者ナリ

戒嚴地ヲ分チテ臨時地境及合圍地境トス戰時若クハ事變ニ際シ警戒ヲ要スル地ハ臨戰地境ニシテ敵ノ合圍若クハ攻撃ニ際シ警戒ヲ要スル地ヲ合圍地境ト爲ス
戒嚴ヲ宣告スルニハ時機ニ應ジ其要スヘキ地域ヲ區劃シ之ヲ施行ス而シテ臨戰地境ト宣告セラレタル時ハ其地域内ニ於テハ軍隊司

令權ト行政權及ヒ司法權ト相併立シ唯タ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其他ノ司令官ニ管掌ノ權アルカ故ニ行政官及ヒ司法官ハ其指揮ニ服スルナリ若シ合圍地境ト宣告セラレタル地ハ其地域ニ於ケル行政司法ノ權ハ共ニ軍隊司令權ニ移リ行政官及ヒ司法官ハ其指揮ヲ受ケ其命令ヲ行フ

戒嚴ハ解止ノ宣告ニ依リ其効力ヲ失ヒ行政及ヒ司法ハ總テ其ノ常例ニ復ス解止ノ宣告ハ大權命令ニ依ル

第十五條 天皇ハ爵位勳章及其ノ他ノ榮典ヲ授與ス

本條ハ天皇ハ榮譽ノ淵源ナルユトナ明ニシタルモノナリ
爵ヲ分チテ五ト爲ス公侯伯子男是ナリ
位ヲ分チテ十六階ト爲ス正一位ヨリ從八位ニ至ル

勳章ニハ大勳章アリ勳章アリ金鷄勳章アリ寶冠章アリ

其他ノ榮典ハ褒賞賞牌賞杯學位ノ類アリ
凡ソ臣民ノ名譽ヲ表彰スルノ方法其宜シキヲ得ルハ大井ニ臣民
ノ道義心ヲ獎勵シ大井ニ愛國ノ志氣ヲ奮起セシムルニ足ルモノニ
シテ榮典就中爵位ヲ廢止セントスル議論ハ數々起ルモノナレド其
本ツク所ハ單ニ空想ノ論理ニ過キスシテ人類實際ノ希望如何ヲ考
察セサルカ故ニ常ニ之ヲ實行スルヲ得ス
外國ヨリ受ケタル勳章ノ如キモ日本臣民ハ之ヲ佩用センニハ天皇
ノ允許ヲ經サル可ラス(明治十八年十一月第三十五號布告)

第十六條 天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ス

本條ハ天皇ノ司法大權トシテ大赦特赦減刑復權ノ事ヲ規定ス元來
刑法規定ノ一部ニシテ唯々事ノ重大ナルノ故ヲ以テ之ヲ憲法ニ掲
クルノミ

大赦ハ特別ナル犯罪ニ對シテ行ハレ特赦ハ特別ナル人ニ對シテ其
刑罰ヲ赦免ス減刑ハ刑期ノ短縮ニシテ復權ハ公權ノ回復ナリ刑法
第一編第八節及ヒ刑事訴訟法第八編第二章第三章ニ於テ其手續ヲ
規定ス

刑罰權ハ國家統治權ノ作用ニシテ刑罰ハ國家ノ生存ヲ害スル者ニ
對シテ科スルノ制裁ナリ國家ノ目的ノ變遷ニ由リ刑罰權ノ作用モ
又變遷ス曾テ國家ノ禁止又ハ命令シタル所モ變シテ禁止命令トセ
サル所トナルハ史ニ徴シテ見ル可キナリ然レモ刑罰ハ法律ノ規定
ニ由リテ科セラルルモノナリ法律ハ人爲ナリ人爲ハ將來ヲ預知ス
ルコト難シ將來確定セサル事項ハ豫メ法律ヲ制定シテ事ノ適合セ
ンコトヲ待ツコトヲ得ス是ニ於テカ國家ノ元首タル天皇ハ將來ノ時
宜ニ循ヒ正ニ刑罰ヲ赦免シ又ハ輕減スルヲ以テ統治ノ宜シキヲ得

タルモノトス故ニ之ヲ憲法ニ明定ス併モ又皇室ノ慶吊或ハ國家ノ吉凶ニ依リ時ニ此恩典ヲ施スコトアルヲ以テ其目的ヲ明記セス此憲法發布ノ時ニ於テ今上天皇陛下ハ其何人タルニ關セス國事犯人ハ總テ之ヲ犯罪ヲ赦免シタルノ大例アリ亦以テ聖旨ノ欽仰ス可キヲ知ル可キナリ而シテ國事犯トハ如何ナルモノナルヤハ刑法ノ問題ニ屬ス外國ニ於テモ赦減刑復權等ヲ命スルノ大權ハ君主又ハ大統領ニ屬スルノ例アリ

第十七條

攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル

攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ

本條ハ攝政ヲ置クコト及ヒ攝政ノ權能ヲ定メ皇室典範ハ攝政ヲ置ク場合及其ノ順序ヲ定ム

攝政ハ皇室典範第十九條ノ規定ニヨリ天皇未ダ成年ニ達セサル時

若シクハ久シキニ亘タルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラスル能ハサル場合ニ於テ之ヲ置ク天皇ノ成年ハ滿十八年(皇室典範第十三條)ニシテ普通臣民ノ成齡ト同シカラス久シキニ亘ルノ故障トハ事實ノ認定ニ屬シ皇族會議及樞密顧問ノ議決ヲ經ルヲ法トス攝政ニ任スルノ順序ハ皇室典範第二十條以下ニ規定スル所ニシテ皇位繼承ノ變體ニ屬ス

攝政ハ天皇一時ノ疾病又ハ旅行ニ在スノ故ヲ以テ國權ヲ代理監國セシムルモノト同シカラス天皇ノ意思如何ニ拘ラス國法ノ結果トシテ天皇ノ名ニ於テ統治權ヲ行フモノニシテ統治者其人ニ非ス天皇ト合体トシテ統治權ノ主体ヲ形成スルモノナリ故ニ天皇ノ一身上ニ關スル權力及榮譽ハ依然天皇ニ在リ例ヘハ陛下トイヘル敬稱ハ之ヲ攝政ニ用ユルヲ得ズ然レトモ攝政ハ臣民ニ非ス天皇ノ大權

ヲ行使スルカ故ニ法令ヲ以テ之ヲ檢束スルコトヲ得ズ
攝政ハ統治權ノ全部ヲ行ヒ一部ヲ行フモノニ非ス本條ニ在ル大權
トハ憲法上ハ大權ノ意ニ非スシテ統治ノ大權トイヘル意ナリ國法
カ特ニ除外例ヲ設クルノ外總テ之ヲ行フモノナリ憲法第七十五條
ハ憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得スト規
定スルハ則チ此除外例ナリ皇室典範第廿八條ハ攝政及其ノ子孫大
傳未成年ノ天皇保育者皇室典範第廿六條ニ任スルヲ得スト云ヒ攝
政ハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シタル後ニ非サレハ太傅ヲ退職セ
シムルコトヲ得スト規定スルモ亦一ノ制限タルヲ失ハス
攝政ハ天皇ノ爲ニ統治權ヲ行フ故ニ 天皇ノ名ニ於テ之ヲ行フコ
トヲ要ス 天皇ノ名ニ於テト云フハ 天皇ノ代理者ト云フ意ニ非
スシテ自己ノ名ニ於テ之ヲ行フヲ得ザルノ義ナリ 天皇ノ代理

監國ト攝政トノ差異ハ前者ハ 天皇ノ委任ニ據リ特定ノ事件ニ對
シ特定ノ範圍ニ於テ權力ヲ行使シ後者ハ憲法ノ結果ニシテ委任ニ
據ラス其ノ權力ハ統治權ノ全部ニ涉ルニ在リ
本條ニ所謂攝政ハ我カ歴史ニ在ル攝政ト同シカラスシテ官職ニ非
スシテ特別ノ國法上ノ地位ヲ有ス攝政ヲ以テ恰モ民法上ノ後見人
ノ如ク論スル者アリト雖モ統治權ノ行使ハ民法ニ所謂能力ト相一
致セス故ニ後見人ノ法理ヲ以テ推論スルトキハ統治權ノ性質ヲ謬
ルノ恐レアリ予ハ攝政ヲ以テ皇位ノ延長ト斷セント欲ス即チ攝政
ハ 天皇ト合体シテ國權ノ主体タルモノナリト論ズ
攝政ハ 天皇ノ意思ニヨリ其ノ權力ヲ行ハサルカ故ニ 天皇ノ意
思ヲ以テ之ヲ廢スルヲ得ス國法ノ結果ニヨリ之ヲ得又之ヲ失フ攝
政ヲ必要トスル情態ノ未タ存在スルヤ否ヤハ 天皇親ラ之ヲ決定

スルヲ得ズ 天皇ノ成年ハ皇室典範ニ明定アルモ久シキニ亘ルノ故障ノ消滅セシヤ否ヤハ之ヲ決定スルノ手續ナシ皇族會議及樞密顧問ノ議ハ故障ノ存在ヲ決定スルノ權限ヲ有スルモ消滅ノ決定ヲ爲スノ權限ヲ有セス 天皇ハ又有効ナル意思ノ發表ヲ欠クカ故ニ攝政之ヲ爲スヲ以テ親ヲ決定スル能ハズトセバ國法上ノ論結トシテハ攝政自ラ之ヲ決定スト爲サ、ル可ラズ 天皇崩御シテ皇太子尙母胎ニ在ルトキハ攝政ヲ置クベキヤ歐洲公法家ノ多數ノ意見ハ之ヲ未成年ノ場合ト認メ皇位繼承者ハ直ニ即位セスシテ攝政ノ任ヲ行フト云フト雖モ我カ皇室典範ハ此点ニ關シ明文ナキヲ以テ直ニ此斷論ヲ爲スニ躊躇セザル可ラス

第二章 臣民權利義務

本章ノ主意タル專ラ行政權ノ作用ヲ以テ臣民ノ公權ヲ侵害スルコトナカラシムルコトヲ期シ兼テ臣民ノ人格ヲ公認シ吾人カ立憲政體ノ爲ニ絶叫シタル希望ヲ滿タシタルモノナリ專制ノ政體ニ於テハ臣民ハ私法上ニ於テコソ自主體ナレ公法上ニ於テハ家畜ノ所有主ニ於ケルカ如キ狀況ニシテ君主ノ奴隸タルヲ免レス 國家ト個人トノ間ニ事實的關係ノ外權利ノ關係ヲシト看做サル、ノ例乏シカラズ

臣民ノ國權ニ服従スルハ無限ニシテ一定ノ際涯アル可キニアラズ故ニ本章ニ所謂臣民ノ權利ハ國權ニ對スルノ權力アリト云フニ非スシテ臣民ハ國權ニ服従スルカ故ニ國家ノ保護ヲ受ケ國家ノ目的ヲ害セサル範圍ニ臣民ノ權利ヲ公認スルナリ公權ハ權力ニ非ズシテ人格ナリ公法ニ依リ保護セラレタル人格ヲ公權ト云

ラ人格ハ權能ナリ故ニ公權ハ國法ニ依リ意志ヲ以テ人格ヲ主張スル場合ニ存在ス人格ノ範圍ハ國法ニ依リ定マリ行政行爲ヲ以テ人格ヲ毀損スルヲ許サズ

日本臣民トハ團體組成ノ分子ニシテ法ニ依リ存在スルモノニ非テ法ノ創設以前ニ存在スル統治客体ノ一ナリ憲法ハ君臣ノ分義ヲ明カニスルモノニ非スシテ臣民ノ人格ノ範圍ヲ確定ス

第十八條 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

本條ハ新ニ日本臣民籍ヲ獲得スルノ要件ハ法律ニ依ルコトヲ規定ス
日本臣民トハ外國臣民及無籍外人ト區別スルノ謂ナリ臣民トハ國家ニ對シテ絕對無限ニ服從者タルノ資格ヲ云フモノニシテ國家ハ

臣民アリテ後ニ成立シタルモノニ臣民ハ國家成立ノ要素ナリ臣民タルノ資格ハ國家ノ創定物タル法律以前ニ確定セルモノナリ故ニ本條ハ臣民タル吾人カ國法上臣民タル所以ノ要件ヲ規定セルニ非スシテ外國人カ任意ニ我が臣民ト爲ルノ要件ヲ規定スルノミ即チ舊民法人事編國民分限ニ關スル規定及歸化法ヲ豫想セルモノナリ
本條以下ニ在ル法律トハ帝國議會ノ協贊ヲ經タルモノヲ云フ依テ將來歸化法等ヲ制定スルニハ必ス議會ノ議事ニ附シ命令ヲ以テ規定スルヲ得ズ外國臣民ハ日本臣民ト等シク私權ヲ享有スト雖モ公權ヲ享有セサルヲ各國普通ノ公法トス
私權ト公權トノ分界ハ學者ノ至難トスル所我輩試ニ之ヲ區別セシニ公權トハ公法上ノ權利ノ意ニシテ公法ニ依リ保護セラレタル人

格ナリ私權トハ私法上ノ權利ノ意ニシテ私法ニ依リ保護セラレタル利益ナリ公權ハ自主ノ權能ニ隨伴シ私權ハ權能ヲ行使スルニ由リ生スル利益ニ隨伴ス公權ノ剝奪ハ人格ヲ毀損スルモ私權ノ讓渡ハ利益ノ減少ニシテ人格ヲ毀損セズ例ヘハ剝奪公權ハ公權ヲ消滅スルモ所有權徵收ハ財產能力ノ消滅ニ非サルカ如シ

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

本條ノ主意ハ文武官ニ任セラレ其ノ他ノ公務ニ就クハ日本臣民ノ公權ノ一ナルコトヲ明定スルニ在リ
任官就務ニハ一定ノ資格ヲ要ス資格ニ二種アリ一ヲ消極的資格ト云ヒ或ル事實ノ存在セサルコトヲ要シ一ヲ積極的資格ト云ヒ或ル

事實ノ存在ヲ要ス例ヘハ刑罰ニ處セラレタルコトナキ一學校ヲ卒業シタルガ如シ

均シクト言フハ臣民ニ區別ヲ設ケサルノ意ニシテ大ニ留意ス可シ本邦大古ヨリ近世ニ至ル迄ノ歴史ニ徴セバ門閥ヲ以テ賢トナシ格例ニ依テ政ヲ爲シ子孫世襲タリシト雖モ明治憲法ノ制定ニヨリ此制度因襲ヲ革メ爾今以後血統門閥ニ拘ハラス國政學ヲ有職ニ任スル 天皇ノ聖旨ニシテ實ニ一大ノ新制ナリ
其他ノ公務トハ官吏ニ非スシテ國家ノ公務ヲ爲スノ義ニシテ議會ノ議員辨護士公證人等ノ職務ヲ云フ

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス

本條ハ兵役ハ日本臣民ノ公義務ナルコトヲ規定ス

抑モ國家ノ獨立ヲ完フセシカ爲メニハ其生存ヲ害セントスル外敵ニ對スルノ強力ナカル可ラス於是乎古來何レノ國ト雖モ兵ノ設アラサルハナシ本邦ノ古制ニ依レハ海内擧テ皆ナ兵ニシテ天子之レガ元帥トナリ臣民一般ニ兵役ノ義務アリシナリ然ルニ中朝將門ノ稱起リ強弱各々其分ニ從ヒ或ハ兵タリ或ハ農タルノ制ヲ生シ將門ハ必ス軍人タル可キモノニシテ商民タリ農民タルハ異例ナリシ農民タリ商民タル者ハ世々農民タリ商民タル可キ者ナリシ農民商民ニシテ軍ニ入ルハ異例ナリシナリ然ルニ明治維新ヨリ以還大畧古制ニ復シ日本臣民ハ一般ニ兵役ノ義務ヲ有ス可キモノトシ特ニ徵兵令ヲ制定シ之レニ準據シ義勇公ニ徇奉スルコトヲ定ム

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納稅ノ義務ヲ有ス

本條ハ租稅ヲ納入スルハ日本臣民ノ公義務ナルコトヲ規定ス
租稅ハ財政上ノ收入ノ爲メニ國家ノ權力ヲ以テ個人ノ財產ノ一部ヲ國庫ニ徵收スルモノヲ云フ國家ハ財產ヲ有スルモノ之ヲ資本トシテ利殖シ蓄積スルコトヲ主義トセス國政ノ費用ハ臣民オシテ分擔セシムルヲ通則トス國家カ權力ニ由リ個人ノ財產ヲ強制徵收スル場合ニ種々アリ例ヘハ土地収用軍事徵發ノ如キ之レナリ(第廿七條第二項)然レトモ是等ハ物件其者カ其ノ形体ニ於テ公用ニ必要ナルモノニシテ行政上ノ目的ニ出テ租稅ノ如ク財政上ノ收入ノ目的ノ爲メニセズ
法律ノ定ムル所ニ從ヒトハ第六十二條ト照應シ納稅ノ義務ハ法律ニ由リ定メ行政ノ專權ニ委任セサルヲ云フ
然レトモ納稅ノ義務ハ獨リ日本臣民ニ限ルニ非ス稅ハ國權ノ下ニ

在ル人及財産ニ對スルモノナルカ故ニ國籍ノ内外ヲ問ハザルヲ原則トス

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス

本條ハ臣民ノ住居及移轉ノ自由ハ法律ニ由ルニ非レハ制限スルコトヲ得サル事ヲ規定ス

昔時封建ノ時代ニ於テハ各藩殿ニ其ノ境域ヲ劃シ藩民ノ他藩ニ移轉スルヲ許サ、リシカ維新後其慣習ヲ革メテ住居及移轉ハ臣民ノ自由ナリトナシタルモノナリ

本條以下憲法ハ專ラ法律ニ依ルニ非レハ臣民ノ自由ヲ制限スル能ハザルカ如ク規定ス然レトモ自由ノ制限ト警察トハ性質上相離ルヘガラサルモノニシテ若シ臣民ノ自由ヲ制限スルニハ總テ法律ニ

依ルヲ要スルモノトセハ警察ノ處分ハ皆法律ノ規定ニ基クヲ要スルニ至ルベシ然モ憲法ハ第九條ニ於テ廣濶ナル命令權ヲ認ムルカ故ニ本條以下ハ其ノ例外トシテ行政ノ弊害最モ著シク臣民ノ利害ニ關係スルコト最モ深ク且法律ニ由テ一般ノ規定ヲ設クルコト難カラザル等數多ノ理由ニ基キ二三ノ事項ニ付テ命令ノ作用ヲ制限シタルニ過ギザルナリ即チ此ノ例外ノ規定ハ廣キ解釋ヲ許サズ主トシテ主觀的自由ヲ制限スル場合トナスベシ

依テ本條ノ規定ハ制限ノ理由居住及移轉ソレ自身ニ存スル場合ニ限リテ法律ヲ要スルモノナリ故ニ或ル家屋カ危險ナルカ爲ニ之ニ住居スルコトヲ禁シ又ハ風土病ノ危險ヲ避ケンカ爲メニ或ル地域内ニ移轉スルコトヲ禁スルハ必シモ法律ヲ要セサルベシ

居住及移轉ノ自由ヲ制限スル法律多シ其ノ主ナルモノハ刑法保安

條例、海外旅行ニ關スル諸法令等ノ如シ

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕

監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

本條ハ日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕、監禁、審問、處罰ヲ受クルコトナキヲ確保ス即チ刑事訴訟法、刑法等ハ法律タルベキ事ヲ云フ

本條ハ主トシテ行政官府カ一時ノ機宜ニ應シ司法權ノ作用ヲ紊亂スルコトヲ防クノ目的ニシテ次條ト相關聯ス

本條ハ武器使用ニ關シ何等ノ規定スル所ナク現ニ巡查拔劍ノ事ハ内務大臣ノ達ニヨリ定マレリ(明治十七年内務省達)

故ニ本條ハ治罪ノ手續ハ法律ノ規定ニ依ルヲ要スルト云フニ止リ醉狂人ヲ留置シ癡狂人ヲ監禁スルカ如キ行政警察ノ爲ニ強制手段

ヲ施行スルハ其ノ範圍外ナリト論定セザル可ラズ(明治八年達第二十九號行政警察規則)

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁

判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルコトナシ

本條ハ司法權ノ行使ハ法定ノ裁判官ニ據ルガ故ニ日本臣民ハ此裁判ニ依ラズシテ猥リニ其ノ自由ヲ拘束セラレザルコトヲ規定ス即チ行政權ヲ以テ司法權ノ行使ヲ犯サハルコトヲ目的トシテ規定シタルモノナリ

法律ニ定メタル裁判官トハ憲法第五十八條ニ在ル裁判官ニシテ裁判所構成法ニ詳載ス

違警罪即決例ノ如キハ警察官ヲ特ニ裁判官トナシタルモノニシテ憲法施行後ニ係ルモノナルトキハ大ニ論議ノ目的タルヲ得ベシ

凡ソ裁判ハ公平ナルモノニシテ臣民ノ善悪及ヒ訴訟ハ公平ナル裁判所ノ裁判ニ因テ明ナルモノナレバ裁判官以外ノ人ノ裁判ニヨリ善悪得喪ヲ判明スルモノ之レニ服從シ以テ臣民ノ自由ヲ褫奪セラル可キモノニアラサルナリ而シテ茲ニ法律ニ定メタルトハ裁判所構成法ノ定ムル所ヲ謂フモノナリ

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラレコトナシ

本條ハ人ノ生存ヲ保持スルニ於テ最モ必要ナル住所安固ノ權ヲ保障ス

夫レ人ノ家宅ハ人ノ城廓ナリ何人ト雖モ濫リニ侵犯スヘカラス然リト雖モ司法處分ノ目的ヲ達スル必要ヨリ此權利ヲ顧ミルニ違フ

ラサル場合アリテ止ムヲ得ズ住所ヲ侵犯シ家宅ヲ搜索セザルヲ得ズ是レ併シ乍ラ眞ニ必要ノ場合ニ限ルモノナレバ特ニ法律ヲ以テ規定セラルヘキモノトス此故ニ法律ノ規定ニ基カサル限リハ假令警察、收税又ハ司法ノ官吏ガ其職務ヲ行フ爲メ之ヲ侵犯搜索スルモ尙且其罪ヲ問フコトヲ得ベシ況ンヤ一私人ニシテ之ヲ侵犯搜索スルヲ得サルハ勿論ニシテ刑法ハ明カニ人ノ住所ヲ侵スノ罪ヲ規定セリ所謂法律ニ定メタル場合トハ民刑訴訟法、國稅滯納處分法、其他警察法ニ於テ定ムル所ニシテ皆司法權ノ目的ヲ達スル必要ヨリ生シタルモノナレバ此必要以外ニ出テ行政ノ便宜ノ爲メニ司法ノ作用ヲ紊亂スルヲ許サス然レドモ水火災消防又ハ人命ヲ救護スル爲メニ住所ニ侵入スルハ法律ニ據ルヲ要セズ侵入搜索ハ二ケノ事項ニ非スシテ一事項ト解釋シ前條ト相關聯シテ見ルヲ要ス

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク

外信書ノ秘密ヲ侵サル、コトナシ

信書ハ人ガ其意志ヲ文字ニ表ハシテ他ニ通知スルモノナレバ其意志ノ秘密ヲ保ツノ必要ト同ク信書ノ秘密ハ最モ必要ナルモノナリ人事百般ノ交際上其意志ノ秘密ヲ世上ニ暴露スルヲ欲セザルハ人ノ感情ニシテ此秘密ノ漏洩ヨリ事ヲ誤ルコトモ亦少ナシトセス世ノ開明ニ進ムニ從ヒ益々其必要ヲ感ス本條ニ於テ信書ノ秘密ヲ保護セラレタルハ實ニ近世進歩ノ大勢ニ伴ヒタルモノナリ信書ノ秘密タルニ於テハ封書ニ限ラス端書又ハ電報ト雖モ亦同ク苟クモ之ヲ開披シ之ヲ漏洩スルヲ許サス(改正刑法第六十八條ハ之ヲ犯罪トシテ現行刑法ノ欠ヲ補充ス郵便條例電信條例等ハ各其秘密ヲ犯スノ制裁ヲ規定セリ然レモ又國家生存ノ上ニ於テ此秘密ヲ侵サ、

ルヲ得サルノ必要アリ刑事ニ於テ犯人搜索証憑蒐集ノ爲メ民事ニ於テ破産ノ場合又戰時ニ於テ戰時ノ漏洩ヲ恐ル、場合ノ如キ是レナリ此場合ハ特ニ訴訟法商法戒嚴令等法律ニ於テ明カニ規定アルモノニ限リ其以外ニ於テハ決シテ之ヲ開披シ隱匿スルヲ得ズ

第二十七條 日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サル、コト

ナシ

公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

所有權ハ財産ニ於ケル權利ノ名稱ニシテ動産不動産ヲ別タズ其所有者ハ自由ニ之ヲ處分シ使用シ又之ヨリ生スル利益ヲ収ムルコトヲ得ベク決シテ他ノ侵犯ヲ受クルコトナシ本條ハ國家ト雖モ之ヲ侵サ、ルベキコトヲ確保シタルモノナリ抑モ財産ノ貴重セサルベカラザルハ生命ニ次グモノニ人世上ノ快樂苦患一ニ之ニ繫ル若シ其享

有ニシテ完全ナラサルコトアラハ艱難ヲ凌ギ勳勞ヲ勵ムモノ跡ヲ絶チ技能ヲ練磨シ大計ヲ企圖スルモノ無ク社會ヲ擧ゲテ紛亂枯朽スルニ至ラン本條特ニ之ヲ定メラレタルハ 詔勅ニ「朕ハ我臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其享有ヲ完全ナラシムベキコトヲ宣言ス」トアルニ應シ臣民ノ權利中極メテ重大ナルモノ、一ナリ然レモ此權利モ亦固ヨリ無限ノモノニ非ズ社會公共ノ利益ノ爲メ必要ナル場合ハ其使用ヲ制限セラレ又ハ収用ヲ強ラル、コトアルベシ是レ社會ノ公益ト個人ノ私益ト両立スベカラサル場合ニシテ私人ノ權利ハ公共ノ利益ノ爲メ犠牲ニ供セサル可ラス公益ノ爲メ必要ナル處分ハ法律ヲ以テ規定ス本條ハ主トシテ公用徵收ノ規定ニシテ土地収用軍事徵發等法規ニ由テ所有權ニ干渉スルハ本條ノ範圍外ナリ新民法第二百六條第二

百七條ハ所有權ハ明ニ法令ノ制限内ニ存在スルノ權利ナルコトヲ明言ス故ニ國家カ所有權ヲ侵スノ外觀アルモ法令ノ制限外ニ所有權ハ存在セサルナリ

鐵道敷設市區改正河川疏通城塞軍港建築ノ必要ニ依リ土地ヲ収用セラレ其他戰時ノ徵發刑事ノ沒收等其任意ニ非ズシテ徵收セラレ、場合ハ各法律ヲ以テ規定セラル而シテ刑事沒收ノ外ハ相當ノ格ヲ定メテ之ヲ所有者ニ賠償スルヲ常例トス

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

本條ハ單ニ宗教ヲ信仰スルノ自由ヲ規定セラレタルニ非スシテ臣民ハ如何ナル宗教ニテモ安寧秩序ヲ妨ケス又臣民タルノ義務ニ背カサル限リハ之ヲ奉シテ其教旨ニ從ヒ儀式ヲ用ヒテ禮拜シ布教シ

得ヘキヲ保証セラレタルモノナリ夫レ信仰ナルモノハ人心内部ノ作用ニシテ假令國家ノ權力ヲ以テスルモ之ヲ禁遏シ得ヘキモノニ非ス亦之ヲ禁スルハ國家ノ目的ニ關係セサルナリ然レモ此信仰發動シテ外部ニ顯ハレ言論ト爲リ行動ト爲ルニ於テハ己ニ國家ノ干渉スヘキ範圍ニ入ルモノナレバ其安寧秩序ヲ妨ケ又ハ臣民ノ義務ニ背クモノハ之ヲ禁制セサルヘカラス例ヘバ異教相爭ヒテ騷擾ヲ醸シ信徒團結シテ國憲ヲ紊ラントシ又ハ教旨ト稱シテ風俗ヲ破リ倫序ヲ害シ裁判所ニ於テ宣誓ヲ拒ミ兵役ノ義務ヲ免レントスルガ如キ是レナリ苟クモ是等ノコトナキニ於テハ何等ノ宗教ヲ奉ズルモ自由ニシテ決シテ古來外國ニ於テ國教ナルモノヲ設ケ其人民ヲ強制シテ盡ク之ニ入ラシメ又我國維新以前基督教信仰ヲ禁シタルガ如キ制限ヲ爲サスト云フニ在リ本條特ニ注意スヘキハ憲法第二

章ヲ以テ保証シタル臣民ノ自由中行政上ノ命令ヲ以テモ亦制限スルコトヲ得ルハ獨リ信教ノ自由ノミ即チ其信教ガ安寧秩序ヲ害スルト否トハ其教旨ニ依ル所ナキニ非ズト雖モ多クハ當時ノ事情ト布教ノ方法トニ依ルモノナルヲ以テ豫シメ法律ヲ以テ其場合ヲ指定シ難ク專バラ行政權ニ委任シ警察上ヨリ臨機必要ノ禁令ヲ發セシムルモノトス是レ信教ノ自由ハ其外形ニ現ハレタル所ヲ制限スルニ止マリ信教其モノヲ制限スルニ非ルガ故印刷集會等ノ自由ノ外形ヲ以テ其本体トスルモノトハ規定ヲ異ニスル所以ナリ臣民タルノ義務トハ必シモ法律上ノ義務ヲ指示スルニ非ス忠君愛國及國權ノ理由ハ其ノ意味スル所ナリ總テ事實上ノ認定ニ屬ス

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス

言論ハ言語ヲ以テ人ノ思想ヲ發表シタルモノニシテ文字ヲ以テ發表スル之ヲ著作トス印行ハ廣ク之ヲ傳播スルノ方法ナリ人ノ思想ハ心中ニ存シ信教ノ自由ト同シク自由ナリ國家ハ人ノ思想ニ入りテ干涉スルヲ得ズ人ノ思想ニシテ自由ナル上ハ之ヲ發表スル言論著作印行亦自由ナラサルヘカラサルハ當然ナリ集會ハ人類多數ノ會合ニシテ結社ハ或目的ノ爲メニ多數ノ人が結合シタルモノ俱ニ是レ思想交通ノ方法ナリ言論著作印行ニシテ自由ナラハ集會結社モ亦自由ナラザルベカラズ人ノ思想ヲ交通スルハ又智識ヲ交換スル所以ニシテ政治學術農工商業ノ發達隆盛モ之ニ賴リテ期スベク人文ヲ發達スル上ニ於テ瞬時モ欠クベカラザルモノトス然レモ其勢力アル所以ハ亦能ク危害ヲ釀成スルコトアリ之ヲ以テ其自由ハ無限ノモノタル能ハズシテ國家ハ其安寧風俗ヲ維持スル必要ヨリ

之ニ關スル制限ヲ設ケザルヲ得ズ是等ノ制限ハ皆事ノ重大ナルモノナレバ必ズ法律ヲ以テシ決シテ行政命令ヲ以テ制限スルコトヲ許サ、ルナリ本條法律ノ範圍内ニ於テトアルハ即チ是ナリ言論ニ關スルモノハ集會及政社法ニ於ケル演說ノ中止刑法ニ於ケル不敬罪官吏侮辱罪誣告及ヒ誹毀ノ罪又ハ人ヲ罵詈訛流言浮說ヲ爲シテ人ヲ誑惑スル罪ノ如キ是ナリ著作印行ニ關スルモノハ刑法ニ於テ規定シタル官吏侮辱罪誹毀ノ罪風俗ヲ害スル冊子圖書ヲ販賣スル罪ノ外猶出版法新聞紙法等ニ於テ制限ヲ嚴ニシ以テ言論ヨリ其傳播スル所廣ク且其痕跡ノ永久ニ存在スヘキ勢力アル著作印行ノ取締ヲ設ケタリ集會結社ニ關スル制限ハ主トシテ集會及政社法ノ規定スル所ニシテ諸種ノ強要又ハ禁止條規ノ外集會ニハ解散ヲ命ゼラル、場合アリ結社ハ之ヲ禁止セラル、場合アリ均シク安寧秩序

ニ妨害アリト認めラル、時ニシテ此認定權ハ集會ノ場合ハ臨監ノ警察官結社ノ場合ハ内務大臣ニ存ス是レ安寧秩序ヲ妨害スベキ場合ハ法律ヲ以テ一々之ヲ規定スル能ハザルヲ以テ止ムヲ得ズ之ヲ行政官ノ手ニ委テタルモノナレバ其局ニ當ルモノハ宜シク本條ノ主意ヲ体シテ臣民ノ自由ヲ重シテ荷クモ職權ヲ濫用スルガ如キ形跡ノ存セサルヲ要ス又其集會結社ノ目的政治上ニ非スシテ學術又ハ商事等ニ在ルモノハ殆ンド十分ノ自由ヲ有シテ法律上普通ノ監督ヲ受クルノミ

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル

所ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲スコトヲ得

本條ハ臣民請願ノ權ヲ規定セラレタルモノナリ請願トハ上奏請願等ト自カラ性質ヲ異ニシ公共ノ爲メ又ハ一個人ノ爲メニ或ル利益

ヲ得ントシ又ハ或害難ヲ除カン爲メ公權ニ依テ其希望ヲ達セントスル各種ノ請求ニシテ行政官廳ニ對シ帝國議會ニ對シ請願スルヲ得ルノミナラズ或ハ至尊ニ對シテモ之ヲ許サル此權利タル實ニ重要ナルモノニシテ人民參政權中ノ重モナルモノナリ臣民ハ代議士ヲ撰擧シテ國民ノ輿望ヲ伸ルノ方法アルモ其運動ニシテ意ニ充タサルコトアリ否ラサルモ事一個人ニ關シテ其希望ヲ伸フル能ハザル場合アルベシ是ニ於テカ初メテ請願權ノ貴重ナルヲ知ル然レモ素ト請願ハ行政訴訟ト異ナリ傷害セラレタル吾ガ權利ヲ回復スルニ非ラズシテ至尊又ハ國家機關ノ權力ニ依リ隨意ニ施行セラルベキ事業ニ就テ自己ノ希望ヲ述ブルニ過ギザルヲ以テ宜シク相當ノ敬禮ヲ守リテ之ヲ爲サ、ルベカラズ而シテ請願ノ事項ニ依リ自カラ之ヲ提出スル所ヲ異ニスベク從ツテ其順序手續請願ノ体裁方式

等ハ別ニ規程ヲ設ケラル、ナリ

第三十一條 本章ニ掲ケタル條規ハ戰時又ハ國家事

變ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ

本條ハ前數條ニ規定シタル臣民ノ權利ハ或場合ニ於テ完全ニ之ヲ保護シ能ハザルコトヲ規定セラレタルモノナリ即チ外國ト戰ヲ開キ或ハ內國ニ於テ戰亂其他ノ事變起リタル場合トス夫レ臣民ノ自由ヲ保チ其權利ヲ完フスルハ憲法ノ精神ナリ然ルニ戰時又ハ國家事變ノ場合ニ之ヲ侵犯スル所以ノモノハ或一部ニ對シテ此ノ如クセザレバ全般ノ自由權利ヲ保護セントスル國家ノ目的ニ反スルヲ以テナリ此故ニ戰時又ハ國家事變ノ場合ニ於テ第一章ニ規定アル天皇大權ノ施行ニ依リ法律ニ代ルヘキ敕令ヲ發セラレ又ハ戒嚴ヲ宣告セラレタル場合ノ如キハ臣民ハ其居住及移轉ノ自由ヲ殺ガレ

法律ニ依ラザル逮捕監禁審問處罰ヲ被ムリ普通ノ犯罪民事ノ訴訟モ軍事裁判ノ裁判ヲ受クヘク住所安固ノ權ヲ侵犯セラレ信書ノ秘密所有權ノ安全ヲ破ラル、コトアルモ亦不得止コト、ス(戒嚴令參照)

第三十二條 本章ニ掲ケタル條規ハ陸海軍ノ法令又

ハ紀律ニ抵觸セサルモノニ限り軍人ニ準行ス

本條ハ軍人ニ關スル規定ナリ軍人ト雖モ亦帝國臣民ニシテ從ツテ本章ノ權利ヲ有スヘキモノナレトモ然レモ軍人ハ又最モ緻密嚴格ナル軍規ニ服從シテ違背スルヲ得ザルモノナレバ普通臣民トハ其自由ノ上ニ於テ著シク異ナリ居住移轉ノ自由言論著述集會結社ノ自由モ軍紀ヲ保ツ上ニ於テ止ムヲ得ズ殺ガレ、ナリ然レモ是レ其例外ニシテ自由ナルコソ却ツテ原則ナレバ陸海軍ノ法令又ハ紀律

ニ抵觸セザルモノニ限り普通臣民ト同シク本章ノ權利ヲ有スルコトヲ規定セラレタルハ必要ナキ場合ニ於テモ尙且ツ此自由ヲ減殺スルガ如キコトナキヲ保明セラレタルモノトス

第三章 帝國議會

本章ハ帝國議會ノ成立及ヒ其職權ヲ規定シ議法ノ大綱ヲ定メ以テ立憲制度ノ實ヲ表彰ス抑モ帝國議會ハ憲法ノ正條ニ依リ立法ニ參與スルモノニシテ憲法以外ニ在リテ職權ヲ有セサルナリ是憲法上ノ統治機關タル所以ニシテ憲法ヲ改正スルニアラザルヨリハ帝國議會ヲ廢止スルコトヲ得ザルナリ世人或ハ外國ニ於テ君主ト議會ト統治權ヲ分掌スルノ例アルヲ見テ本邦ノ議會ヲ以テ同一視スル者アラシモ我帝國議會ハ天皇ト共ニ統治權ヲ分掌ス

ルモノニアラス帝國議會ハ立法ノ機關ニシテ唯ニ立法ニ參與スルノミ法ヲ議スルノ權アリテ法ヲ制定スルノ權ナク又議會ハ臣民ヲ代表シテ建議スルニアラス議會直接ノ職務ハ法律豫算ノ議決ナリ民意ヲ斟酌スルハ議會ノ職務上自然ニ導キ來ル所ニシテ議會ノ目的ニ在ラズ臣民ハ帝國議會ヲ組織スルノ分子ナリト雖モ已ニ組織セラレタル議會ハ天皇立法ノ機關ニシテ臣民建議ノ事務所ニアラス要之帝國議會ハ天皇立法ノ機關ニシテ憲法上ノ統治機關ナリ統治權ノ主体ニアラス天皇立法ノ機關ノ一ナリ

第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス

本章ハ帝國議會ノ成立ヲ定メタルモノナリ帝國議會ハ二院制ナリ一ヲ貴族院ト言ヒ一ヲ衆議院ト言フ貴族院ハ貴紳ヲ集メ衆議院ハ

庶民ヨリ選ヒ茲ニ帝國議會ヲ成立シ以テ國家統治ノ機關タルモノナリ二院合同セザレバ帝國議會ヲ成サズ故ニ貴族院ノミチ召集スルモ議會ヲ成サズ又衆議院ノミチ召集スルモ議會ヲ爲サズ必ス兩院一時ニ召集ス可キナリ召集ナクシテ自集シタルハ假令ヒ貴衆兩院合集スルモ未ダ帝國議會ヲ爲サス

帝國議會ノ制ハ一院制ヲ可トスルヤ二院制ヲ可トスルヤハ曾テ黨爭シタル所ナリト雖モ之レヲ歐洲多數ノ邦國ニ稽ルモ大抵二院制ニシテ又歷史上二院制ヲ以テ良策ト爲スモノ、如シ願フニ之レ相互ニ長短ヲ採ツテ圓滿ヲ謀ルモノニシテ本邦ノ帝國議會モ之レカ爲メ二院制ヲ採リタルモノナラン希臘ノ如キハ一院制ナリ其他一院制ヲ可トスルヤ否ヤニ付テハ尙ホ論述ス可キヲ有リト雖モ事自ラ立法政策ノ論ニ傾クナリ以テ敢テ論セス

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇

族華族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

本條帝國議會ノ分子タル貴族院組織ノ要件ヲ定メタルモノナリ貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニヨリ皇族華族及ヒ勅任セラレタル議員ヨリ組織ス貴族院令ハ勅令第十一號ヲ以テ發布セラレタリ此勅令タルヤ尋常ノ勅令ト異ナリテ一種特別ノ法力ヲ有スルコトハ貴族院令第十三條ニ將來此勅令ノ條項ヲ改正シ又ハ增補スルハ貴族院ノ議決ヲ經可シト規定シタルヲ視テ知ル可シ全体法律ト勅令トノ異ナル所以ハ其規定ノ實體ニ於テ異ナルニアラスシテ其形式ニ於テ異ナルノミ凡ソ勅令ハ帝國議會ノ協贊ヲ要セスシテ廢止變更スルヲ得ルハ勅令固有ノ性質ナレ共貴族院令ハ貴族院ノ議決ヲ經サレバ變更スルヲ得サルナリ雖然貴族院令ハ又法律ニアラス

法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經サル可ラス而シテ貴族院ハ帝國議會ノ一局部タリト雖モ前已ニ述フルカ如ク帝國議會ハ必ス貴衆兩院ノ合同シタル議會ナラザルヲ得ス故ニ貴族院ノミノ議決ヲ經ルモ未ダ以テ法律トナラス之レ貴族院令ノ法律ニアラス一種特別ノ勅令タル所以ナリ

貴族院ハ左ノ議員ヲ以テ成立ス

第一、皇族ノ男子ニシテ成年ニ達シタル者

皇族ノ定義ハ載セテ皇室典範第三十條ニ在リ曰ク皇族ト稱スルハ天皇、太后、皇太后、皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王妃、女王ヲ謂フト皇族ノ成年ハ皇太子皇太孫ハ滿十八年其他ノ皇族ハ滿二十年ナリ(貴族院令第一條第一號皇室典範第十三條及第十四條)

第二、公侯爵ヲ有シ滿二十五年ニ達シタル者(第一條第二號及第三條觀)

第三、伯子男爵ヲ有スル者ニシテ滿二十五年ニ達シ各々其同爵中

ヨリ選舉セラレタル者(第一條第三號第四條)

第四、國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル滿三十年以上ノ男子ニシテ勅任セラレタル者(第一條第四號及第五條第七條)

第五、各府縣ニ於テ滿三十年以上ノ男子ニシテ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者十五人中ヨリ一人ヲ互選シ其選ニ當リ勅任セラレタル者(第一條第五號第六條第七條)

貴族院ハ以上ノ資格ヲ有スル議員ヲ以テ組織ス而シテ明治二十二年三月二十七日勅令第四十一號ヲ以テ公布セラレタル勅令ニ因レバ衆議院選舉法及貴族院令ニ於テ所謂直接國稅ト稱スルモノハ地

租所得税ノ二種ヲ謂フニ外ナラス尙ホ終リニ一言ス可キハ皇族華族ハ以上ノ資格要件ヲ得レバ直チニ議員タルノ資格アリト雖モ第四第五ニ掲ケタル議員ハ勅任ヲ以テ始メテ議員ノ資格ヲ得ルモノナリ殊ニ各府縣ヨリ公選互選セラレタル者ハ選舉ニヨリ議員タルノ資格ヲ得ルニアラスシテ勅任ヲ以テ補メテ議員タルモノナリ公選即チ互選ハ衆議院選舉法ニ所謂選舉ト異ナルモノニシテ公選ハ勅任ヲ受ク可キ者ヲ定ムルモノニシテ衆議院選舉ノ如ク當選ニ因テ直チニ衆議員タルモノト同視ス可ラサルナリ要之帝國議會ノ二院制ヲ採リ以テ貴族院衆議院ノ兩院ヲ置クモノハ貴族院議員ハ或ハ世襲タリ或ハ選舉又ハ勅任タルアリト雖モ均シク上流社會ヲ代表スル者ニシテ貴族院ニシテ其職ヲ得ルニ於テハ政權ノ平衡ヲ保チ政黨ノ偏重ヲ防キ肆議ノ趨勢ヲ撓メ衆議院ト對シテ照應シ以テ

國家ノ大政ヲ圓滿ナラシムルモノナリ外國ニ於テ貴族院ヲ上院ト稱シ衆議院ヲ下院ト稱スレトモ本邦ニ於テハ古來臣民ニ上下ノ別アルナク又施政ニ上下ノ阻アル可ラス一体ニシテ君主ノ統治權内ニ存スル所ナリ之レ外國ニ模倣シ上院下院ト名稱セサル所以ナラ

第三十五條 衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員ヲ以テ組織ス

本條ハ帝國議會ノ一部局タル衆議院ノ組織ノ要素ヲ定メタルモノナリ本條ノ明文ニ依レハ衆議院ハ總テ公選セラレタル議員ヲ以テ組織スルモノニシテ貴族院ノ組織ト同シカラサルナリ而シテ其選舉ノ手續議員ノ資格ノ如キ細節ハ時局ノ趨向ニ伴ヒ屢次改正補修ヲ要スルコトアルベキヲ以テ本條ハ之ヲ尋常法律タル選舉法ノ規

定ニ讓リタリ然レトモ公選ナル要件ハ特ニ本條ノ明規スル所ナル
ヲ以テ假令選舉法ニシテ幾多ノ變更ヲ經ルコトアルモ苟モ本條ノ
改正ナキ限リハ公選ノ方法ヲ捨テ、抽籤、勅任其他公選以外ノ方法
ヲ設クルハ違憲ナリトス現行衆議院議員選舉法ハ明治二十二年二
月法律第三號ヲ以テ公布セラル其選舉人ノ資格ヲ定ムルコト左ノ
如シ

- 第一 日本臣民タル男子ニシテ年齡滿二十五才以上ノ者
- 第二 選舉人名簿調製ノ期日ヨリ滿一年以上其府縣内ニ於テ本
籍ヲ定メ住居シ仍引續キ住居スル者
- 第三 選舉人名簿調製ノ期日ヨリ滿一年以上其府縣内ニ於テ直
接國稅十五圓以上ヲ納メ仍引續キ納ムル者但所得稅ニ付
テハ人名簿調製ノ期日ヨリ滿三年以上之ヲ納メ仍引續キ

納ムル者

被選人ノ資格左ノ如シ

- 第一 日本臣民タル男子ニシテ滿三十才以上ノ者
- 第二 選舉人名簿調製ノ期日ヨリ滿一年以上其選舉府縣内ニ於
テ直接國稅十五圓以上ヲ納メ仍引續キ納ムル者
但所得稅ニ付テハ人名簿調製ノ期日ヨリ滿三年以上之ヲ
納メ仍引續キ納ムル者ニ限ル

選舉ハ國務ニ堪能ナル者ヲ選擇スル行爲ニシテ而モ此行爲ハ直接
ニ國家ニ對シテ爲スモノタリ選舉人ト被選人ノ間ニ代表ノ關係ヲ
生セス從テ國運ノ消長ニ關スル公法的事項ニ屬スルモノタリ外國
ニ於テハ尋常法律ヲ以テ定メタル選舉規定ノ全部ヲ學テ憲法ノ條
章ト共ニ永久不動ナラシメント試ミタルノ成例アリ亦以テ選舉法

カ如何ニ憲法ト密着ノ關係ヲ有スルヤヲ見ルニ足ラン

第三十六條 何人モ同時ニ兩院ノ議員タルコトヲ得ス

本條ハ二院制ヲ設ケタル趣旨ヲ全フスル爲メノ規定ナリ抑我邦ニ於テ二院制ヲ採リタルハ議會ヲシテ適正ニ大政輔翼ノ績ヲ收メシメントスルモノニシテ一院ノ議決ニ據ラスシテ其組織相異チレル他ノ一院ニ於テ更ニ審討熟議ヲ經セシメ粗笨杜撰ノ所爲ナキヲ期スルノミ然ルニ若シ一人ニシテ同時ニ兩院ノ議院タルヲ得ルモノトセバ這般ノ利益ハ全ク得ルニ由ナク名ハ二院ナリト雖モ實ハ一院ト異ナル所ナク二院制ヲ採用シタル目的ハ全ク水泡ニ販セン且ツ一人ニシテ兩院ノ議員ヲ兼ルニ於テハ何レカ一方ニ對シテハ常ニ曠職ノ責ヲ來スノ己ムヲ得ザルニ至ル是レ特ニ本法中ニ明記セ

ラレタル所以ナリ然レトモ貴族院議員ニシテ衆議院議員ニ當選シタルトキ其當選カ當然無効ニ販スルニ非ス何トナレハ本條ハ唯一人ニシテ同時ニ兩院ノ議員タル地位ヲ占ムルコトヲ禁スルモ既ニ一院ノ議員タル者ハ他ノ一院ノ議員タル資格被選權ヲシト規定セサレハナリ此場合ニハ何レカ一方ヲ辭スルノ外ナキナリ

第三十七條 凡テ法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス

本條ハ第五條ト對照シ議會ノ立法協賛權ヲ設定シタルモノナリ本條ノ規定ニ依レハ總テ法律ヲ制定スルニハ必ス議會ノ協賛ヲ經ルヲ要シ協賛ナキモノハ其規定ノ内容如何ニ拘ハラス法律トシテ發布スルコトヲ得ザルベシ然レトモ議會ノ協賛ヲ經タルモノハ直チニ法律ナリト速斷ス可テ

ス議會ノ協賛ヲ經ルモ天皇ノ裁可ナキトキハ法律ト爲ルコトナシ是レ立法權ハ獨リ天皇ノ掌握シ玉フ所ニシテ議會ハ唯立法ノ材料ヲ供スル一機關タルニ過キサレノ結果ニシテ法律案ノ政府ヨリ提出セラレタルト議院ヨリ提出セラレタル場合ナルトテ問ハザルナリ協賛ハ承諾ナル文字ニ對スル術語ニシテ兩院一致シテ議事ニ贊參スルヲ云フ一院ノミニテハ議決アレトモ協賛ナシ外國ニ於テハ協賛ノ區域ト法律ノ區域トハ全ク同一ナリトシ協賛ヲ經タル事項ノ全体ヲ法律ナル汎稱ノ下ニ一括スルノ成例アリト雖モ我邦ノ法理ニ於テハ協賛ノ區域ハ法律ノ區域ニ比シ一層汎濶ニシテ彼ノ豫算ノ如キモ憲法第六十四條ノ規定ニ依リ必ス議會ノ協賛ヲ經ベキモノダレトモ豫算ハ豫算ナル特種ノ形式ヲ具フル行政事項ニシテ其協賛ヲ經タルカ爲メ變シテ法律ト爲ルコトナシ如何ナル事項ハ法

律ヲ以テ規定スベキヤ換言スレハ立法ノ材料トナルベキ事柄ノ性質如何トハ學理上一個ノ問題ニシテ其材料ヲ一々列記シタル立法例ハ歐洲諸邦ノ憲法ニ於テ往々見ル所ニシテ奧國ノ如キハ殊ニ其著シキモノダリ我邦ニ於テハ則ニ原則的ニ之カ條規ヲ設ケスシテ特別ノ事項ニ限リ法律ヲ以テ定ムベシトナス例ハ憲法第二章ニ掲ケタル日本臣民ノ權利義務ノ如キ裁判所及會計検査院ノ構成ノ如キ又ハ議院法ノ制定ノ如キハ即チ是レナリ之ヲ要スルニ法律事項ト命令事項トノ間ニ性質上絶對的ノ區別在ツテ存スルニ非ス歐洲ノ憲法史ヲ離レテ帝國憲法ノ研究トシテハ唯事ノ慎重周緻ヲ要スルモノハ法律ニ依テ定ムベク專ラ迅速機敏ヲ尙フモノハ命令ニ委スルモノト云ハサル可ラス要スルニ帝國議會ノ立法協賛權トハ立法權ニ非スシテ憲法ニ於テ法律トシテ制定スベキ事項ニ關スル

法律案ヲ議定スルノ職權ナリ

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及各法律案ヲ提出スルコトヲ得

本條ハ法律案提出權ノ所在ヲ規定ス即チ提案權ノ所在ヲ示ス提案權ハ政府及ヒ兩議院ニ在リ議院ノ提案權ハ之ヲ議員ノ發議權ト區別スルヲ要ス通俗ニ何某外何名何々案提出ト云フハ議員ノ發議權ト區別スルヲ要ス通俗ニ何某外何名何々案提出ト云フハ議員ノ發議ニシテ議院ノ提案ニ非ス(議院法第二十九條參照)

凡ソ法律實施ノ局ニ當ル者ハ政府ナルヲ以テ直接ニ法律ノ不備缺點ヲ感スル者モ亦政府ナリ從テ法律案ヲ提出スル如キモ先ツ政府ヨリスルヲ順當トスレトモ貴族院又ハ衆議員ニ於テモ舊法ノ改正或ハ新法ノ制定ヲ必要ト認ムルトキハ則チ自ラ案ヲ具ヘテ提出ス

ルコトヲ得ベキナリ

政府ノ提出シタル議案ハ議會之ヲ可トシ又ハ之ヲ否トシ若クハ之ヲ修正スルコトヲ得其可決シタルモノニシテ天皇ノ裁可アルトキハ直チニ法律トナリ又一ノ議院ヨリ提出シタルモノハ他ノ一院カ可決シ天皇ノ裁可アルハ直チニ法律トナルコト政府ノ提出ニ係ルモノト異ナルコトナシ

茲ニ參考ノ爲メ議案提出ニ關スル先例ヲ掲ケシニ第一議會ニ於テ政府提出ノ議案ニハ内閣總理大臣及主務大臣ノ連署シタル左ノ提出文ヲ添ヘタリ

某議案

右勅旨ヲ奉シテ帝國議會ニ提出ス

第四議會ニ於テ政府ヨリ初メテ豫算案ニ對シ修正案ヲ提出スルヤ

內閣總理大臣及主務大臣ノ連署ヲ以テ左ノ提出文ヲ添ヘタリ

某案

右ノ內議院法第三十條ニ據リ

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

第九議會ニ於テハ內閣總理大臣及主務大臣ノ連署シタル提出文ヲ

添ヘ別ニ勅旨ヲ奉シタルヤ否ヤヲ明言セザリキ

某案

右ノ內議院法第三十條ニ據リ別紙ノ通り修正ス

以上述フル所ハ單ニ法律案ノ提出ニ關ス然レモ第六十五條ノ規定

ニ依リ豫算ハ必ス政府ニ於テ之ヲ作り帝國議會ニ提出ス且ツ先ツ

衆議院ニ提出スベキノ制限アリ又第七十三條ニ依リ憲法條項ノ改

正案ハ政府モ帝國議會モ提出權ヲ有セズ別ニ天皇ノ勅命ニ出ツベ

キノ特例アリ各條ノ下ニ至テ其理由ヲ闡明セン

第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ

同會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス

貴衆兩院ノ一ニ於テ既ニ否決シタルモノヲ同會期中ニ再ヒ提出ス

ルハ議會ノ威嚴ヲ毀損スルノ嫌アルノミナラス徒ラニ議事ヲ遷延

シ一事ニ拘滯スルノ弊アラントス故ニ本條ハ斷然之ヲ禁止セリ既

ニ否決シタル同一ノ議案ノ名稱字句ヲ變改シ再ヒ提出スルコトヲ得

ルヤ否ヤハ其變改ノ程度ニ依テ決スベキ事實問題ナリ苟モ既ニ否

決セラレタルモノト同一ノ議案ト見ルベキ程度ナラノニハ斷メ本

條ノ禁止ニ觸ル、モノトス然レモ發議權ハ本條ノ範圍外ナリトス

或ハ兩院ノ可決シタル法案ニシテ天皇ノ裁可ヲ得サル場合ニハ明

文ナキヲ以テ同會期中再度提出スルヲ得ルヤ否ヤヲ疑フ者アリト

雖モ事實上此ノ如キ場合ハ生セザルナリ何トナレバ上奏シタル法案ニ對シ天皇ハ別ニ不裁可ヲ宣言シ玉フニ非ス兩院亦天皇ニ對シ決答ヲ促シ奉ルノ權利ナキヲ以テ議院法第三十二條ニ依リ次會期ニ至ルマテ裁可不裁可ヲ知ルニ由ナケレハナリ

第四十條 兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各其ノ意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得但シ其ノ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得ス

本條ハ議院ニ建議ノ權アルコトヲ掲ケタルモノナリ議院ハ法律案ノ材料トナルベキ事實ヲ調査シ難キコトアリ又ハ自ラ法律案ヲ作ルヲ適當トセサルコトアリ本條ハ此如キ場合ニ於テ議院ニ自ラ法律案ヲ提出セスシテ意見ヲ政府ニ提出シテ其起草制定スルニ任ス

ル權能ヲ賦與シタルモノトス

其他ノ事件トハ法律以外事項ニシテ大權事項財政事項ニ屬スルモノヲ云フ例ヘハ外交上軍政上及行政大体ノ主義ニ關シテ意見アル場合ノ如キ是レナリ

然レドモ建議ハ元來或事項ヲ自己ノ意ノ如クセントノ希望ヲ陳ブルニ過ギサレバ政府ニ向テ其採納ヲ強ユルノ權ハ固ヨリ議院ニ存セサルナリ政府ノ之ヲ採納セサルハ建議事件ヲ以テ時宜ニ適セスト認定シタル外ナラサルベシ然ルヲ僅々三ヶ月ノ會期中ニ再ヒ建議スル如キハ徒ラニ紛擾強迫ニ涉ルノ恐アルヲ以テ本條ハ之ヲ禁過シタルモノニシテ提案ニ關スル前條ノ法文法意ト正ニ相照應ス終リニ臨ンテ尙一言スベキモノアリ他ナシ一ノ事項ヲ議院ヨリ建議シタルニ政府之ヲ採納シ案ヲ作テ議院ニ下シタルニ議院ハ之ヲ

否決スルノ權アリヤ否ヤノ一問題はナリ議院ハ自己ノ期望ニ由リ採納ヲ促シタルモノナレハ後ニ至リ之ヲ否決スルヲ得ザルニ似タリ然レドモ其案ノ模様ニ依リテハ他ニ廢案理由生セサルヲ保セス例ヘハ中途ニシテ議員ノ改選アリタル如キ又ハ其事件ニ關スル法律上ノ關係ノ變化ヲ來シタル場合ノ如キ是等ノ場合ニ於テハ充分ニ否決ノ權アルモノト言ハサル可ラス

第四十一條 帝國議會ハ毎年之ヲ召集ス

本條ハ帝國議會ノ存立ヲ保障シタル法條ナリ帝國議會召集ノ權ハ本法第條ノ規定ニ依リ天皇ノ大權タルコト明カナリ然レトモ若シ召集ノ度數ヲ定メサルトキハ三年五年若クハ十年一回召集セラル、モ可ナラシ然ルニ國家ノ立法上行政上萬般ノ事項ハ毎年其狀況ヲ改メ或ハ年々新事業ヲ起スノ必要アリ且本法第六十四條ニ依リ

毎年豫算ヲ以テ國家ノ歲出入ヲ議セサルヲ得サルカ故ニ此点ヨリ見ルモ年々開會ハ必要欲ク可カラサルモノナリ若シ年々ノ召集ヲ怠ルコトアリトセンカ實ニ憲法違反ノ行動タルヲ免レス然ラハ其違憲ノ責ハ何人ノ負フ處ナルカト釋ヌルニ天皇ハ神聖不可侵ナルヲ以テ第五十五條ノ規定ニ依リ之ヲ補弼ノ任ニ當タレル國務大臣就中召集ノ事務ヲ執掌スル内務大臣ニ於テ其責ニ任セサル可ラス然リト雖モ此補弼ヲ愆リタル場合ニ之ヲ責問スルノ手續方法ハ未タ國法ノ定メサル所ナレハ刑法上之ヲ罰スルノ途ナク民法上賠償ヲ要ムルノ術ナク懲戒法上亦之ニ處スルノ方法ナシ然レハ萬一此ノ如キ場合ニ接到スルアラハ唯至尊無上ノ大權ニ依リ免黜又ハ責問シ玉フノ外アラザル可キ歟

召集ハ毎年爲サ、ル可カラサルコト以上述べルカ如シト雖トモ一

年内ニ於テハ人民生活ノ狀況ト政府事務ノ都合トニ依リ何レノ時期ヲ以テスルモ差支ナシ唯從來ノ慣例ニ依レハ通常會ハ毎年冬季ヲ以テ召集セラル、カ如シ蓋シ豫算議定ノ便ニ依ルカ爲メナラン而テ召集ノ勅諭ハ集會ノ期日ヲ定メ少ナクトモ四十日前ニ發布スベキコト議院法第一條ノ定ムル處ナリ

若シ夫レ臨時議會ノ召集及ヒ全ク召集ヲ爲サ、ルノ特例ハ次條及ヒ第七十條ノ解説ニ讓ル

第四十二條 帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ

本條ハ議會存立ノ時間即チ會期ノ定メタルモノナリ會期ニ通常ト臨時ノ二種アリ本條ハ通常會ニ關ス三ヶ月ト定メタルハ別ニ深遠

ナル理由ノ存スルニ非ス外國多數ノ實例ニ徴シ三ヶ月ヲ以テ大抵充分ナラント想定シタルニ由ル既ニ本條ノ制限アリ以テ議事ノ遷延窮極ナキノ弊ヲ防クヲ得ヘシ然レドモ議事ノ模様ニ依リテハ三ヶ月ノ會期ヲ以テ不足トスルコトアルベシ此場合ニハ勅命ヲ以テ會期ヲ延長スルコトヲ得ベシ

序以一言スベキハ勅命ト勅令トノ差異ナリ勅令ハ其實質ニ於テハ法律ト等シク一般遵由ノ効力アルモノニシテ主トシテ永久ノ事件ノ爲メニ發スルモノニシテ只天皇ノ親裁ニ出ツルノ一点即チ形式ノ上ニ於テ法律ト同カラサルベシ勅命ハ帝國議會、樞密院、各省、陸海軍ノ如キ國家一部ノ機關ニ對シ一時ノ事件爲メニ發シ其機關ヲ指揮スルモノニシテ外部即チ一般臣民ニ對スルモノニアラス議會閉會スルトキハ會期ノ事務ハ終リテ告クルモノトシ議案建議

請願等未タ議決ニ至ラサルモノハ次回會期ニ繼續スルコトナシ只
議院法第廿五條ノ規定ナ一ノ除外例トスルノミ同條ニ曰ク各議院
ハ政府要求ニ依リ又ハ其同意ヲ謀テ議會閉會ノ間委員ヲノ議案ノ
審査ヲ爲サシムルコトヲ得ルノミ要スルニ議會一タヒ閉會ヲ告ク
ルヤ議會ハ茲ニ全ク廢絶スルモノニ之レ實ニ他ノ行政官府ト性
質ノ異ル要所ナリトス

第四十三條 臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ

外臨時會ヲ召集スヘシ

臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル

議會ハ少クモ毎年一回召集セザル可ラザルハ既ニ第四十二條ノ
確定スル所ナリト雖モ國家政務ノ繁褥ナル到底百般ノ議政ヲ常會
ノ協贊ニノミ是レ待ツ可カラス本條ノ規定蓋シ欠ク可ラザルナリ

臨時緊急ノ必要アルト否ヤ及ヒ臨時會ニ召集スベキヤ否ヤハ專ラ
天皇ノ勅定ニ依テ定マル所臣民之ヲ促ガスノ權利ナク又之カ必要
ト否トヲ論議スルノ自由ナシ臨時會ノ成立ハ開會以前ニ在リトス
臨時會ハ唯々其時期ヲ常會ト異ニスルノミ其他一切ノ事項ハ常會
ノ例ニ準ス故ニ臨時會召集ノ目的タリシ議題以外ニ於テ自ラ法律
案ヲ提出シ又ハ政府ノ提出案ヲ議題ト爲スコトヲ得ヘシ臨時會ハ
其名稱ノ示ス如ク勿論臨時緊急ノ必要ニ迫ラレテ召集スルモノナ
レハ其議題ノ如キハ固ヨリ豫定セサルナリ臨時會ノ會期ハ憲法之
ヲ限定セス召集ノ勅諭ニ於テ定メラル、所ニ依ル亦時宜ノ必要如
何ニ依ラシムルノミ

第四十四條 帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及停會
ハ兩院同時ニ之ヲ行フヘシ

衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ 停會セラルヘシ

本條ハ貴族院又ハ衆議院ノ一方ノミナ開會シ他ヲ開會セサルコトヲ
制止スルモノタリ前既ニ述ベタルガ如ク帝國議會ハ貴衆兩院ノ合
同体ニシテ貴族院及ヒ衆議院ハ僅カニ其一局部タルニ止マル而シ
テ本條列掲スル所ノ開會閉會停會等ノ事タル決シテ議會ノ一局部
タル議院ニ對スルノ處分ニ非スシテ實ニ兩議ノ合同ヨリ成レル帝
國議會其物ノ全局ニ對スル處分タレハ兩議同時ニスベキハ事理ノ
當然ナレバナリ

解散ハ議員各個ニ對シ議員タル資格ヲ解除スル一ノ處分ニシテ議
院ニ對スル以上數種ノ處分ト性質ヲ異ニス歐洲ノ學說上或ハ之ヲ
輿論ニ對スル上告ト稱シ一旦解散ヲ命ザタル後ノ召集ニ應スル議

員ニシテ全ク前ノ議院ト同一ナルトキハ現政府ハ輿論ニ容レラレ
サルモノトシテ更迭セザル可ラスト云ヘリ

茲ニ注意スベキ一事アリ他ナシ停會ナル文詞全ク相異ナレル二様
ノ意味ヲ有スルコト是レナリ

第一ハ普通ノ停會ニシテ兩院同時ニ行ハル其性質タル只一時會議
ヲ止息スルニ過ギザルナリ故ニ停會後再び開會シタル時ハ前會ノ
議事ヲ繼續スベキモノトシ尙停會期間ハ十五日ヲ超ユルコト明チ
得ス是レ議院法第三十三條ノ明規スル所ナリ

第二ハ同法第三十四條ニ定ムル所ニシテ衆議院ノ解散ニ依リ貴族
院ノ停會ヲ命スル場合ナク此種ノ停會ニ於テハ固ヨリ十五日以內
ナル制限アル筈ナク且ツ前會ノ一事ヲ繼續スルコトナシ

貴族院ハ多ク世襲ノ議員又ハ終身官ヨリ成立ツモノニシテ法律上

其任期ヲ縮少スルコトヲ得サルガ故ニ衆議院ノ解散セラレタルト
キハ同時ニ停會セラル、ナリ

第四十五條

衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅命

ヲ以テ新ニ議員ヲ選舉セシメ解散ノ日ヨリ五箇月
以內ニ之ヲ召集スヘシ

衆議院ノ解散ヲ命スル所以ハ各議員ノ意向カ政府ノ方策ト激烈ナ
ル衝突ヲ來シ到底尋常ノ方法ヲ以テ之ガ調和ヲ爲シ議會ヲシテ協
賛參贊ノ實ヲ學ケシムルコト能ハザルベキ場合ニ施ス緊急處分ニ
シテ其期スル處ハ臣民ヲシテ更ニ國務ノ堪能ナル者ヲ推舉セシメ
以テ議會ノ議決ト政府ノ方針ト相協合セシメントスルニ在リ決シ
テ議會ノ立法機關タル所以ヲ廢絶セントスルモノニ非ラス加之解
散ノ事タル恰モ議會ノ協賛ヲ經ベキモノ錯然輯集スルノ際ニ行ハ

ル、モノナレハ速カニ新議會ノ成立ヲ要スルヤ勿論ナリ是ヲ以テ
本條ハ期日ヲ定メ衆議院ノ官能ヲ保維セシメテ保スルモノナリ故
ニ五ヶ月以內ニ新ニ議會ヲ召集セサルハ即チ違憲ノ行動ニシテ
第四十一條ニ違反シタルト同一ナリ

現在成立シ居ル處ノ議院ノ解散ヲ命スルハ尋常ノ手續ナレトモ其
閉會ニ際シ次年度ノ開會ニ至ルヲ待タスシテ解散ヲ命スルコトヲ
得ルヤ否ヤハ歐洲公法家ノ論議スル所ニシテ又之ヲ斷行シタル實
例アリト雖モ開會以前ニ在テハ議員ノ意向如何ヲ豫知スルコト能
ハス假令次年度ノ議員ニシテ前會ト全ク同一ナリトスルモ議員必
スシモ前説ヲ固執スルモノト云フヲ得ザレハ此ノ如キ處分ハ解散
ノ目的ヲ正當ナル軌道ノ外ニ奔逸セシムルモノト云フベキナリ

第四十六條

兩議院ハ各其ノ總議員三分ノ一以上出

席スルニ非サレハ議事ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

本條ハ帝國議會ノ職務ヲ執行スルニ必要ナル議員ノ定數ヲ定メタルモノニシテ次條ト共ニ議事規則ノ一部分ヲ成ス總議員トハ貴族院令及議院法ノ定マル所ナリ(衆議院議員ハ三百人貴族院議員ノ數ハ確定セス貴族院令ヲ參照スベシ)

本條ノ規定ニ依レハ議事ヲ開キ及ヒ議決ヲ爲スニハ必ス各議院共其議員總數ノ三分ノ一以上ノ出席ヲ要ス故ニ若シ一人ニテモ此定數ヨリ下ルトキハ出席シタル議員ハ每ニ袖手シテ空シク定員ニ充ツルヲ待タサル可ラサルナリ併シナカラ是ハ只杞憂ノミ實際ニ於テハ此ノ如キ場合ヲ生ゼザルベシ故ニ憲法及議院法ハ則ニ此ノ場合ニ處スルノ方法ヲ定メサルナリ

尙本條及次條ニ對シテハ第七十三條ノ重要ナル特別規定アリ注意ノ爲メ茲ニ附記ス

第四十七條 兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

本條モ前條ト同シク議事規則ノ一部分タリ過半數ヲ以テ決ヲ採ルハ議事ノ常則タリ過半數トハ出席者ノ半數以上ヲ云フモノニシテ前條ト標準ヲ異ニス而シテ議長モ亦數中ニ列スルナリ歐洲諸國ノ憲法ヲ見ルニ或ハ半數ナレハ否決トスルモノアリ又ハ其儘次回ニ延ハシ次回ニ於テモ同様ナルトキ始メテ否決トスルアリ本法ハ議長ニ獨決ノ權ヲ與ヘ議事ノ進捗ヲ期シタルナリ

第四十八條 兩議院ノ會議ハ公開ス但シ政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲スコトヲ得

本條ハ兩議院ノ會議ノ原則トシテ公開スベキコト及ヒ秘密會ト爲スベキ場合アルコトヲ定ム夫レ議院ハ衆庶ノ爲メニ國家ノ要務ヲ討論スル所ナルヲ以テ討論可否之ヲ衆目ノ前ニ公ニシ議政ノ適實ヲ表白セサル可ラス是レ原則ナリ然レトモ會議事項ノ性質上秘議ニスルコトヲ要スルモノアリ例ヘハ外交事件人事及職員委員ノ選舉又ハ或財政兵政若クハ治安ニ關スル行政法ノ如キ是レナリ公開トハ必シモ何人ニモ傍聽ヲ許スノ義ニアラス院外ノ人ニシテ職務ニアラスシテ傍聽スルコトヲ許スヲ云フ公開ニ多少ノ制限アルモ公開タル性質ヲ害セサルナリ秘密會トハ公開ノ反對ニシテ職務ニアラスシテ傍聽スルコトヲ禁止スルヲ云フナリ議院ノ外何人ニモ聽カシメサルニアラス秘密會議ト爲ス場合ハ掲ケテ議院法第七章程ニアリ左ノ如シ

尙秘密會議ニ係ル事項ハ刊行スルコトヲ得ス議事ノ性質上又ハ時ノ事情ニ依リ既ニ秘密會議ト爲シ公衆ノ傍聽ヲ禁スル以上ハ一層傳播ノ勢力アル刊行ヲ禁スルハ固ヨリ當然トス

第四十九條 兩議院ハ各々天議ニ上奏スルコトヲ得

本條ハ獨立ニ上奏ノ途ヲ啓キ與ヘタルモノナリ上奏ハ建議ト等シク天皇ニ對シテ自己ノ意志期望ヲ啓陳スルノ方法ニ止マリ之レニ因テ法律上ノ關係ヲ生セサルコト恰モ個人間ニ於テ音信ヲ贈答シ談話ヲ爲スト同一ノ關係ナリ上奏ニ二種ノ別アリ曰ク儀式上ノ上奏曰ク國務上ノ上奏是レナリ廟堂ノ祝儀喪禮ニ關シ議院ノ感覺ヲ述フルモノハ前者ニ屬ス例ヘハ帝國議會ノ開院式上ニ於ケル天皇一議長又ハ議員十人以上ノ發議ニ由リ議院之レヲ可決シタルトキ二政府ヨリ要求ヲ受ケタルトキ

ノ勅語ニ對スル答辭新帝即位ノ式ニ於ケル勅語ニ對スル答辭ノ如キ是ナリ

國務上ノ上奏ハ政府ノ行政權ニ對シ議院ノ意志ヲ立テシカ爲メニ行フ所ナリ憲法ノ規定ニ依レハ外交事務及兵役ハ天皇ノ大權ニ屬シ法律ヲ以テ羈束スルノ限リニ非サルナリ然レモ若シ此等ノ事ニ關シテモ議會ニ於テ意見アルモ先ツ建議シ採納ヲ得サレハ上奏スルコトヲ得ベシ其他議會ハ其協賛シテ法律ト爲リタルモノ、必行ヲ求ムルノ權アリ故ニ若シ政府ノ行動ニシテ法律ノ明文ニ違背シ或ハ立法全体ノ趣旨ニ背馳スル如キコトアルトキハ先ツ質問又ハ建議ニ依リ立法權保護ノ策ヲ講スベキモ是等ノ方法ニシテ尙奏功ノ望ナク議會ト現政府トハ到底兩立スルヲ得スト認ムルトキハ最終ノ方法トシテ天皇ニ上奏シ其聖裁ヲ仰グノ外ナカルベシ議會

ノ解散權ハ是等ノ場合ニ於テ多ク其發動ヲ見ル

第五十條 兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クルコトヲ得

日本臣民相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定マル規程ニ從ヒ聽願ヲ爲スコトヲ行ルコトハ本法第三十條ノ規定スル所ナリ而シテ請願ノ何物タルヤハ同條ノ下ニ於テ略述シタルヲ以テ茲ニ重テ説明セザルベシ請願ヲ受クルノ權モ上奏及建議ト同一ノ法理ニシテ請願者モ請願ヲ受クルモノモ之レニ依テ法律上ノ關係ヲ引起サス詳言スレハ請願者ハ其請願ニ對シ許否ノ決ヲ促カスノ權利ナク請願ヲ受クル者亦之ニ對シ議定セサル可ラサル義務ナシ

議院法ノ規定ニ依レハ請願書ハ議員紹介ニ依リ議院之ヲ受ケ審査委員ニ付シ審査セシム請願委員ニ於テ請願書ヲ以テ規定ニ合ハス

ト認ムルトキハ紹介議員ヲ經テ却下スベク又委員ハ請願文書ヲ表ニ作り其要領ヲ録シ每週一回議會ニ報告ス議會ニ於テ請願ノ採擇スベキヲ議決シタルトキハ意見ヲ付シ政府ニ送り報告ヲ求ムルヲ得

請願ニシテ一旦院議ニ上リタルモノハ必ス可否ノ決ヲ採ルベキモノタルヲ第八議會ノ先例ナリ

又議院法ニ依ルニ議會ノ請願ヲ受クルコトヲ得ザルモノ左ノ如シ

- 一、憲法ヲ變更スル請願
- 二、哀願名義ニ依ラズ及其體式ニ違フモノ
- 三、請願書ニシテ皇室ニ對シ不敬ノ語ヲ用キ政府又ハ議院ニ對シ侮辱ノ語ヲ用キルモノ

四、司法及行政ニテ決スルノ請願

此制限ハ本法第三十條ノ「相當ノ敬禮ヲ守リ」ナル規定ト表裏相應スルノ法條ナリ

臣民ハ或ハ至尊ニ請願シ或ハ行政官府ニ請願シ又ハ議院ニ請願スルコト總テ其隨意タリ而シテ議院ニ於テ個人ヨリ請願ヲ受クルトキハ或ハ之ヲ審査シ或ハ單ニ之ヲ政府ニ紹介シ或ハ之レニ意見書ヲ附シテ政府ノ報告ヲ求ムルコトヲ得請願ヲ受クルノ權ハ往時元老院ニ於テ之ヲ有シタルカ故ニ本條ノ規定ヲ以テ新規ノ制度ト見ル可ラザルナリ

第五十一條 兩議院ハ此ノ憲法及議院法ニ掲クルモノノ外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得

本條ハ議院ニ規則制定ノ權ニ認メタリ

本條カ議院ノ制定ニ委スルモノハ單ニ内部ノ整理ニ必要ナル要則ニ限レリ内部トハ議院ノ構成分子タル議員各個ヲ指スナリ即チ議院ノ本條ニ依據シテ制定シタルモノハ各議員ニ對シ縷々議事ニ關シテノミ檢束力ヲ有スルモノニシテ外部即チ一般臣民遑由ノ効力アルモノニアラサルナリ蓋シ議會ハ立法ノ一機關ニシテ外部ニ對シテ効力ヲ有スルモノ大抵議會ノ協賛ヲ要スト雖而モ獨立シテ立法者タル資格ナシ是レ本條規定ノ出ツル所以ナリ

第五十二條 兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意見及表決ニ付院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ但シ議員自ラ其ノ言論ヲ演說刊行筆記又ハ其他ノ方法ヲ以テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依リ處分セラルヘシ

本條及ヒ次條ハ貴衆兩院ノ議員ヲ保護シテ其職ヲ行フニ付キ滯碍ナカラシメンガ爲メ設ケタル成條ナリ夫レ數百ノ議員一堂ノ下ニ會シ國家ノ大事ニ關シテ討議ヲ盡スニ際シテハ充分ニ自己真正ノ意見ヲ吐露シ毫モ逡巡遲疑スル所ナカラシコトヲ要ス斯ノ如クニシテ始メテ議員タルノ本分ニ背カサルモノト謂フベシ然ルニ各議員ノ議院ニ於テ陳辯スル所ハ單ニ過去ノ事實ノ演述ニ非ズシテ重要ナル國務ニ關スル各個ノ意見ナレハ衆論常ニ一撥ニ出ツルコト固ヨリ望ム可キニ非ス政海ノ浪高キ論戰ノ陰險ナル時ニ誹毀侮謔ノ言動ヲ見ルモ政治家熱血ノ迸ル處固ヨリ以テ稀有ト爲スニ足ラサルナリ夫レ然リ而シテ斯ノ如キ場合ニ於テ一々誹毀侮辱等ノ法律ヲ適用シ院外ニ於テ責ヲ負ハシムルニ於テハ何人ト雖モ充分ニ自己ノ意見ヲ吐出スルコトヲ得ザルベク延テ議會ノ本分ヲ傷クル

ニ至ルヤ知ル可キナリ

然リト雖モ論難抗擊全ク無制限ナランニハ院内ノ秩序ヲ紊リ統一
ス可ラサルノ弊害ヲ來スコトナキヲ保セズ此等ノ点ハ所謂内部整
理ノ爲メニ設ケタル方法ニ依リ制裁スベキモノニシテ本條ハ前條
ト相表裏シテ効用ヲ爲スモノナリ

然レトモ議員自ラ其言論ヲ演說刊行筆記シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲ス
ル等ノ手段ニ依リ外部ニ公布スル如キハ前陳セル所ノ必要外ニ涉
レル動作ニシテ之レヲモ保護スルノ理由ナキノミナラス斯クノ如
キハ憤怒ノ劣情ニ出ツルコト多カルベク罰シテ以テ公秩ヲ保ツノ
必要アルモノナリ本レ本條末段ノ法意ナリトス

茲ニ注意スベキ一事アリ他ニアラス本條ノ規定ハ議員其人ノ特權
ヲ賦與スルノ條旨ニアラサルコト是レナリ特權ナルモノハ主觀的

即チ一身ニ付着スルモノナルヲ以テ特權者ハ自己ノ意思ニ隨ヒ之
ヲ拋棄スルコトヲ得ベキモノトス然ルニ本條ハ議事ノ圓滿進捗ヲ
保スル爲メノ客觀的ノ規定ナルヲ以テ議員ハ隨意ニ拋棄スルコト
ヲ得ザルナリ

尙一言スベキハ本條ノ意見ナル文字ナリ外國ニ於テハ曾テ此文字
ニ就テ廣狹兩義ノ解釋ヲ生シ一ハ議院内ニ於ケル議員ノ總テノ發
言ヲ含ムトシ他ノ一ハ單ニ議員ノ職務上ニ關スル發言ニ限り職務
ニ關セザル一ハ斷然一般法律ニ依テ處分スベシトノ二大判例ヲ出
セシコトアリ我憲法ノ解釋上ハ如何ニ決スベキヤト云フニ前述ス
ル如ク此特別規定ノ生シタル趣旨ヨリ推ストキハ狹義ニ解スルノ
寧ロ適當ナルベキ歟

第五十三條 兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患

ニ關ル罪ヲ除ク外會期中其ノ院ノ許諾ヲクシテ逮捕セラレユトナシ

本條モ亦前條ト同一ノ趣旨ニシテ議事ニ對スル保護法ナリトス本條ノ明文ニ會期中トアルカ故ニ開會後閉會前總テノ時間ヲ含ムモノニシテ停會中ト雖モ亦此中ニ入ルモノトス憲法義解ニ於テハ召集後閉會前トアレトモ召集ト開會トノ間ニハ多少ノ日子ヲ存ス可ク而シテ議會ハ開會ニ由テ始メテ働作ヲ爲スモノタレハ開會前ニ於テ既ニ諾否ノ權ヲ有スルモノト見ルハ聊カ妥當ヲ欠クカ如シ本條ノ明文アル爲メ議員ハ一般ノ犯罪ニ就テ直チニ逮捕セラレ、コトナク必ス先ツ議院ノ承諾ヲ經可キモノトス是レ他ナシ凡ソ議員ハ開會中經ヘス國家ノ要務ニ參畫スルモノナルニ一朝突如トシテ司法部ノ奪ヒ去ル所トナルニ於テハ議事ノ進行院內ノ整理ニ關

シ屢々不都合ヲ醸スベク國家重要ノ機關タル議會ニ對スル處置トシテ不可ナル處アレハナリ

以上ハ非現行犯及常事犯ニ關ス現行犯及内亂外患ニ關ル罪ニ就テハ此特例ヲ適用セラル、コトナシ其理由ハ他ナシ現行犯ナルモノハ刑事訴訟法ノ規定スル所ニヨリ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル時ニ發覺シタル犯罪ヲ云フモノニシテ迅速ニ逮捕ノ處分ヲ爲スニ非サレハ罪証湮滅犯人逃走ノ虞アレハナリ準現行犯モ亦此中ニ包含スベシ内亂外患ニ關ル犯罪ハ國家ニ對スル危險ノ度重大ニシテ司法權實行ノ必要ハ議員保護ノ理由ニ比シ一層急ナレハナリ此場合ハ先ツ逮捕シテ然ル後議院ニ通知スベキモノトス承諾ヲ求メラレタル議院ニ於テハ其諾否ヲ議決ニ付スベキヤ又ハ議長ノ專決ニ任スヘキヤハ議院ノ自ラ定ムル所ニ依ル然レトモ凡

ソ諾否ノ標準トナルヘキモノハ逮捕ノ原因ニシテ一個人カ議事ノ安全獨立ヲ妨ケントスルノ故意ニ出テタルヤ否ヤニ存ス裁判上逮捕ノ正當ナルヤ否ヤハ議會ノ準據スベキ標目ニアラサルナリ然レトモ本條ハ唯豫審ノ爲メ其他犯罪嫌疑ノ爲メノ逮捕ニ限り適用セラル、モノトス若シ確定判決ニ依リ刑ノ執行ヲ爲ス爲メ逮捕スル如キハ本條ノ範圍外ナリトス唯有罪ノ確定判決ヲ受ケタルモノハ選舉法ニ依リ被選權ヲキカ故ニ事實上此ノ如キ場合ヲ現出スルコト稀レナルノミ

會期前ニ逮捕セラレ會期後尙拘留中ノ者ハ更ニ議院ノ許諾ヲ要セス其逮捕ヲ繼續スルコトヲ得ベシ然ルニ本條ノ解釋ニ關シ第一期議會ニ於テ議員召集ノ當日ヨリ議論ヲ生シ時ノ衆議院議員末松三郎氏ハ明治二十三年十二月四日左ノ動議ヲ議院ニ提出シ議院ハ大

多數ヲ以テ之ヲ可決シタリ

衆議員議員ニシテ會期前ニ逮捕セラレ開會ノ後仍拘留中ノ者ハ衆議院ノ許諾アルニ非サレハ引續キ拘留スルコトヲ得ス

於茲議長中島信行氏ハ其決議ヲ司法大臣ニ通牒シタルニ司法大臣山田顯義氏ハ之ニ對シテ左ノ覆牒ヲ爲シタリ

本大臣ハ憲法ノ明文ニ從ヒ司法權ノ施行ヲ爲サシムルノ外己ニ着手シタル刑事訴追テ停止セシムルノ權ヲ有セス從テ他ノ權勢ノ諾否ニ因リ司法權ノ必要ナル處分ヲ張弛セシムルコト能ハス故ニ議會ノ議決ニ對シテ何等ノ關係ヲ有スルコトナシ
議院ハ右ノ覆牒ヲ領シ直チニ之ニ對スル議院ノ處分方法ヲ審査セシメンカ爲メ九名ノ特別委員ヲ選舉シタリ而シテ該委員會ハ審議ノ後勅裁ヲ仰クノ外他ニ良法ナシトノ議決ヲ報告シタルモ議院ハ

遂ニ之カ可否ヲ決セスシテ止ミタリ尙ホ刑事被告人トシテ保釋中ノ者ハ第一期議會ニ於テハ議會ニ列スルヲ得ストセシカ第二期議會ニ於テ衆議院議員ニシテ刑事被告人トナリ保釋中召集ニ應ジ且引續キ出席シタル者アリ參考ノ爲メ茲ニ附記ス

第五十四條 國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ各

議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得

本條ハ政府ト帝國議會トノ權利ヲ確定シタルモノナリ夫レ國務大臣ハ法律ノ發布ニ關シ責任ヲ負荷スベキモノヲ以テ法案議定ニ際シ充分ニ其意見ヲ述ベ法律ヲシテ可成現時施政ノ方針ニ協合セシメサル可ラス本條ノ規定ハ蓋シ之カ爲メ存シ政府委員ハ國務大臣ニ代テ議院ニ出席シ政府ノ意見ヲ辯解スルノ官吏ナリ此任ニ當タル者ハ大抵各省次官法制局參事官各省參事官書記官等ナリトス

國務大臣及政府委員ハ議員ノ資格ヲ以テ議院ニ出席スルモノニ非サルカ故ニ議長ノ意見又ハ議院ノ結果ニ依ル懲罰等ハ一切之ニ適用スルコトヲ得ス若シ不當ノ行爲アレハ上奏ノ方法ニ依リ聖裁ヲ仰グノ外アラサルナリ

施政ノ方針ヲ公表シ又ハ質問ニ對スル答辯ヲ爲スハ國務大臣自ラ之ヲ任シ議案ノ辯明ヲ爲シ其他質疑ニ關スル詳細ノ説明ヲ爲ス如キハ政府委員之ニ任スルヲ通例トス

政府委員ハ多クハ一省ノ所管事務ニ通シテ任命セラルレトモ特ニ一省ノ豫算ニ關シ任命セラル、者アリ又政府提出ノ案一般ニ通シテ任命セラル、者アリ又其一議案ノミニ就テ任セラル、者アリ兩院提出ノ議案ノ爲メニ任命セラル、者アリ

國務大臣ハ何時ニテモ議院ニ出席スルノ權ヲ有スルモ其義務ヲ負

フニ非ス故ニ議院ヨリ出席ノ請求ヲ受ルモ亦之ニ應スルヲ要セザ
先例ヲ掲ケンニ第五議會ニ於テ軍艦千島號沈沒事件ニ關スル質問
ルナリ之レニ關スルニ對シ内閣總理大臣及當局大臣ノ出席説明ヲ
要求スルノ動議出テ議院之ヲ可決シテ政府ニ通牒シタルモ政府ハ
之ニ對シ左ノ如キ覆牒ヲ爲セリ

明治二十六年十二月十五日ノ通牒ニ於テ貴議院ハ國務大臣ノ出
席ヲ請求セラレタリ國務大臣ハ何時ニテモ各議院ニ出席スルノ
權ヲ有スルカ故ニ其出席ノ爲メニ特ニ貴院ノ請求ヲ煩ハスヲ要
セス此段覆牒ニ及候也

又法文ニ國務大臣及政府委員ハ何時ニテモ議會ニ出席シテ發言ス
ルコトヲ得トアルカ爲メ討論終結後ニテモ可ナルヤ否ヤニ付第一
議會ニ於テ二日間ニ跨ル一大紛擾ヲ醸シタルコトアリシカ山縣總

理大臣ハ衆議院ニ出席シ本條ノ解釋ニ關シ演說シテ曰ク

憲法第五十四條ニ於テ國務大臣并ニ政府委員ハ何時ニテモ發言
スルノ權ヲ與ヘラレタリ政府ハ勿論議院ノ權利ノ貴重ナルト同
時ニ憲法及ヒ法律上與ヘラレタル權利ヲ拋棄スルコトヲ得ス是
レ恰モ議院ニ於テ議院ノ權利ヲ固守セラル、ト一般ナリ云々
於茲前日來ノ紛擾ハ漸ク局ヲ結ヒタリ
以上數條ノ規定ハ議院法ニ關聯スル所多キヲ以テ講述屢々細節ニ
涉リ又事例ヲ引証シテ多クノ紙幅ヲ費セリ讀者幸ニ諒セヨ

第四章 國務大臣及樞密顧問

本章ハ施政最高ノ官府タル國務大臣及ヒ 天皇至高ノ顧問府タ
ル樞密顧問ニ關スル規定ナリ前章ニ於テハ議政機關タル帝國議

會ニ就キ詳細ナル規定アリ次章司法機關ノ規定ト相俟ツテ國家統治ノ機關ニ關スル規定ヲ完フス蓋シ國務大臣ニハ二様ノ地位アリ即チ憲法上ノモノ及行政上ノモノ是ナリ行政上國務大臣ノ地位ハ法律命令ヲ執行スルコト法律命令ノ立案ヲナスコト及ヒ各管轄スル所ノ行政ノ目的ヲ達スルコトノ職務ヲ有スルモノニシテ内閣官制及各省官制ニ據リ行政各部ノ事務ヲ分擔シ又閣議ヲ經テ之ヲ行フ宜シク行政法學ニ於テ講究スベキモノナリ其憲法上ニ於ケル地位ハ議院ニ出席シテ議事ヲ辯明スルコト議員ノ質問ニ對シテ辯明スル事及ヒ本章ニ於テ規定セル 天皇ヲ輔弼シ凡テ法律勅令其他國務ニ關ル詔勅ニ副署スルノ職務ヲ有スルモノニシテ天皇ニ直隸シ直接ニ其監督ヲ受ク而シテ其任免及ヒ官制ヲ定ムルコト等ハ他ノ官吏官府ト同シク第十條ニ依リ 天皇ノ

大權ニ屬シ詔命勅令ノ範圍ニ入ルト雖モ其存廢又ハ本章ニ規定シタル職務ヲ變更スルコトハ事憲法ノ改正ニ係ルヲ以テ其手續ニ據ルベキモノトス

第五十五條 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス

凡テ法律勅令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

本條ハ國務大臣ノ憲法上ニ於ケル職務ヲ定メタルモノニシテ憲法中最モ貴重ニ又最モ議論多キ規定ノ一ナリ國務各大臣トハ内閣總理大臣及各省大臣ヲ指スモノニシテ宮内大臣ハ之レヲ國務大臣ト云ハサルナリ 天皇ヲ輔弼シトハ政務ニ參贊シ獎順匡救主權ノ行使ヲシテ正當ノ軌道ニ由ラシムルノ謂ニシテ其責ニ任ストハ口ヲ

君命ニ藉テ其責ヲ免ル、コトヲ得ザルノ謂ナリ抑モ大臣責任ノコトハ内外古今其論一ナラズ或ハ君ニ對スルノ責任トシ或ハ人民即チ議會ニ對スルノ責任トス然レモ國務大臣ハ 天皇ニ代リテ其責ニ任スルモノニ非ズ何トナレバ 天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラス如何ナル場合ニ於テモ其責任ナキモノナルヲ以テ本來有ラサル所ノ責任ニ代ルト云フノ理ナケレバナリ此故ニ施政其道ヲ愆ラシカ國務大臣ハ其固有職務タル輔弼ノ大任ヲ盡サ、ルモノトシテ責任セサルヘカラス而シテ其責ハ獨リ 天皇ニ對シテ之ヲ辭スルコト能ハザルノミナラス亦人民ニ對シテモ其責ヲ辭スル能ハザルベシト雖モ之ヲ裁制スルモノハ唯 天皇ニ在リテ人民ニ在ラス即チ我憲法ハ外國ノ如ク特ニ糾彈ノ方法ヲ設ケ國會ノ下院之ヲ告訴シ上院之ヲ裁斷スルガ如キ又議院ノ告訴ニ依リ大審院其他特定ノ裁

判所ニ於テ之ヲ審判スルガ如キ規定ナキヲ以テ各議院ハ 天皇ニ上奏ヲ爲シテ其意見ヲ陳疏シ又ハ大臣ニ質問ヲ爲シテ其答辯ヲ請求スル等間接ニ其責ヲ問フノ途アルニ過キズ是レ政事上ノ行動ニシテ法律上ノ裁制ニ非ルナリ又責任ハ政務上ノモノニシテ普通法上ノモノハ本條ノ規定スル所ニ非ズ大臣ノ地位ニアルモノト雖モ政務上ノ地位ヲ外ニシテ之ヲ見レバ亦一個ノ臣民ナリ其民法又ハ刑法等ノ規定ニ從テ懲罰賠償等ノ責任アルハ勿論ナリト雖モ普通法上ノ訴ハ通常裁判所之ヲ裁判審理シ本條ノ責任トハ自カラ異ナルモノトス而シテ此責任ヲ表示スル所以ノモノハ大臣ノ副署ナリ大臣ノ副署ハ法律勅令其他國務ニ關ル詔勅ガ實施ノ力ヲ得テ公布セラルベキ形式上ノ一要件ニシテ此副署ナキモノハ法律勅令其他國務ニ關スル詔勅トシテ効力ヲ有セス從ツテ有司之ヲ發布シ又

執行スルヲ得サルナリ即チ法律ガ帝國議會ノ協賛ヲ經テ發布セラ
 ルヘキノ要件ト其効用ヲ同フスルモノトス又副署ハ之ニ依テ法令
 ノ適法ナルコトヲ保証シ其責任ノ歸スル所ヲ明ガニスル所以ナリ
 此故ニ若シ其副署シタル法律ニシテ憲法ニ背キ敕令其他國務ニ關
 ル詔勅ニシテ憲法及法律ニ違フ所アラハ之ニ副署シタル大臣ハ輔
 弼ノ大任ヲ完フセザルモノニシテ必ズ其責ニ任セザルベカラス而
 シテ其副署ノ形式ハ內閣官制及公文式ノ規定スル所ナリ內閣官制
 第四條ニ曰ク

凡ソ法律及一般ノ行政ニ係ル勅令ハ內閣總理大臣及主任大臣之
 ニ副署スヘシ勅令ノ各省專任ノ行政事務ニ屬スル者ハ主任ノ各
 省大臣之ニ副署スヘシ

公文式(明治十九年勅令第一號)第三條(廿二年勅令第三百三十九號)ニテ

本條改正ニ曰ク

法律及一般ノ行政ニ係ル勅令ハ親署ノ後御璽ヲ矜シ內閣總理大
 臣年月日ヲ記入シ主任大臣ト俱ニ之ニ副署ス其各省專任ノ事務
 ニ屬スルモノハ主任大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依

リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

本條ハ立法行政ノ機關タル議會ト內閣トノ局外ニ立チ大政輔翼ノ
 任ニ當ルヘキ樞密顧問ノ規定ナリ夫レ 天皇ハ己ニ議政ノ府ヲ設
 ケテ立法ニ參與セシメ行政ノ官ヲ置テ政務ノ執行ヲ命セラル、モ
 事國家全体ノ設計ニ關シ之ヲ立法行政機關ノ一局部ヲシテ決セシ
 ムル能ハサルコトアリ例ヘハ憲法及附屬法律ノ改正ニ關スル件立
 法行政機關ノ間ニ於テ憲法及附屬ノ法律ノ解釋ニ關シ異議ヲ生シ

上奏シタル場合ノ如キ又交戦ノ事列國交際ノ事ノ如キ行政各部ノ官制ノ如キ或ハ法律ノ未ダ規定セザル事件ニ就キ命令ヲ發スル事ノ如キ是ナリ蓋シ是等ノ場合ニ於テハ其精練熟達ノ識見ヲ以テ之ヲ古今ニ考ヘ之ヲ正理ニ照シ國家永遠ノ企圖ヲ定メ不偏不黨ノ解疑ヲ爲シテ能ク聖聰ヲ啓沃スルノ任ニ當ルヘキモノ無カルヘカラス是レ本條ノ規定アル所以ナリ此故ニ樞密院ハ 天皇ノ諮詢ヲ俟ツテ始メテ審議スヘキモノニシテ自ラ發議ノ權ヲ採リ又進ンテ施政ニ干與スルコト能ハサルハ勿論議會又ハ臣民ヨリ請願上書其他通信ヲ受ケ又國務大臣ニ對スル外信書ヲ發シ其他交渉ヲ爲スコトヲ得ヌ即チ統治權ノ行使ヲ職守トスル官府ニ非レバナリ然レモ樞密院ガ諮詢ヲ俟タスシテ議決スル場合ナキニ非ズ皇室典範第十九條是ナリ此場合ハ 天皇久シキ亘ルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラジ給フ

不能ハサル場合ナルヲ以テ或ハ諮詢ノ命ヲ親ラシ玉フ能ハサルノ情況ニ在ルモ皇室ノ大事ニ當リ推諉傍觀スヘキニ非サルヲ以テナリ又樞密院ノ審議上奏ハ諮詢ニ應ヘテ聰明ヲ裨補スル所以ノモノナルヲ以テ其意見ノ採否ハ一ニ至尊ノ聖裁ニ由ルハ勿論其審議ノ事項ハ細大ニ關ハラズ之ヲ公洩スルコトヲ得ザルナリ樞密院官制(明治二十一年勅令第二十二號)ニ曰ク

第一條 樞密院ハ天皇親臨シテ重要ノ國務ヲ諮詢スル所トス

第四條 何人タリトモ年齢四十歳ニ達シタルモノニ非レバ議長

副議長及顧問官ニ任スルコトヲ得ス

第六條 樞密院ハ左ノ事項ニ付諮詢ヲ待テ會議ヲ開キ意見ヲ上奏ス

一、皇室典範ニ於テ其權限ニ屬セシメタル事項

二、憲法ノ條項又ハ憲法ニ附屬スル法律勅令ニ關スル草案及疑義

三、憲法第十四條戒嚴ノ宣告同第八條及第七十條ノ勅令及其他罰則ノ規定アル勅令

四、列國交渉ノ條約及約束

五、樞密院ノ官制及事務規定ノ改正ニ關スル事項

六、前諸項ニ掲クルモノ、外臨時ニ諮詢セラレタル事項

樞密院事務規定ニ曰ク

第一條 樞密院ハ勅命ニ依リ會議ニ下付セラレタル事項ニ付意見ヲ述フ

第二條 樞密院ハ帝國議會若クハ其一院又ハ官署又ハ臣民ヨリ請願上書其他通信ヲ受領スルコトヲ得ズ

第三條 樞密院ハ內閣及各省大臣トノミ公務上ノ交渉ヲ有シ其他ノ官署帝國議會又ハ臣民トノ間ニ文書ヲ往復シ又ハ其他ノ交渉ヲ有スルコトヲ得ズ

第五章 司法

司法ハ國法ニ依遵シ刑罰ヲ斷行シテ社會ノ秩序ヲ保維シ民衆ノ權利ヲ審理シ福祉ヲ保全スルモノニシテ立法行政ノ兩權ト共ニ元首ノ掌握ニ皈一スル所ノ統治作用ノ一タリ往時碩學孟德斯鳩カ一タビ三權鼎立ノ說ヲ唱ヘテヨリ立法司法行政ノ三權ハ各獨立全能ノ權力ニシテ其性質種類ヲ異ニスルモノナリトノ迷想ハ一時法學界裡ニ瀾漫シタリト雖モ今ヤ陳雄ヲ迂說トシテ人ノ排斥スル所ナリ我邦ノ法制ニ於テモ三權共ニ天皇ノ總攬ニ玉フ所

ニシテ固ヨリ別種ノ權利ニ非ス然リト雖モ施政ノ便宜ニ基キ一定ノ機關ヲシテ之ヲ分掌セシメタル以上ハ互ニ其畛域ヲ確守シ相侵犯スルコトナキヲ要ス若シ司法ト立法トヲ混同シ既定ノ法則ニ依遵セス事ニ臨ンテ立法シ其効力ヲ既往ニ遡及セシメシカ官府ハ權力濫用ノ弊竇ニ陥リ民衆ハ身体財産ノ安固ヲ得ザルベシ司法ト行政トヲ混同セシカ行政ハ法則適用ノ狹域ニ萎縮シ社會ノ福祉ヲ増大スル爲メニ進ンテ自由ノ活動ヲ爲スコト能ハサルベシ此ヲ以テ憲法ハ特ニ本章ノ規定ヲ設ケ民衆ノ權利自由ヲ確保シタリ

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム
本條ハ司法權ハ統治權ノ一作用タルコトヲ明カニシ及司法權執行

ノ機關ヲ確定シタルモノナリ

司法權ノ法理上ノ性質ハ衆論趣ヲ異ニシ未ダ確然タル意義ヲ有セスト雖モ要スルニ特定ノ事實ニ對シ法則ヲ適スルモノニシテ特ニ司法官ノ行フ處ノ國權ノ一部ナリト解セバ大過ナカルベシ本條規定ニ依レバ司法權ノ行ハル、ニハ左ノ要件ニ依ル

- 一、天皇ノ名ニ於テスルコト
- 二、法律ニ依リ行ハル、コト
- 三、裁判所之ヲ行フコト
- 四、裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ定ムベキコト

我國體ニ於テハ天皇ハ法ノ源泉ニシテ法ヲ立テ法ヲ行フ一ニ天皇ノ統治權ニ屬ス外國ノ法制ニ依レハ司法權ハ獨立ナリトシ之ヲ君主權ノ外ニ置クモノアリ是固ヨリ我國體ト相容レサル所ナリ我國

ニ於テハ天皇ハ統治ノ全權ヲ總攬シ玉ヒ而シテ司法權ハ統治權ノ作用ノ一ナルヲ以テ假令本條ノ明文ナキモ此大義ハ古今ニ亘テ不易ナリトス天皇ノ名ニ於テトハ一面ニハ司法權ノ所在ハ天皇ニ在ルノ意ヲ昭カニシ一面ニハ裁判所ハ獨立シタル權力ノ主体ニ非スシテ統治機關ノ一タルニ過ギサルコトヲ表明シタルモノナリ
法律ニ依リ行フトハ裁判所カ司法權ヲ實際ニ行用スルニ當リテハ必ス豫メ制定發布セラレタル一定ノ法律規則ニ準據スルヲ要スルモノトシ裁判官其人ノ欲スル所ニ依リ自由任意ニ裁判ヲ爲スヲ許サ、ルノ義ナリ語ヲ換ヘテ之レヲ言ヘバ日本臣民ハ法律ニ依テサル裁判ヲ受クルコトナキモノニシテ本法第廿四條ニ於ケル日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハル、コトナシトノ規定ト相待テ完全ナル効用ヲ成スモノナリ唯彼レニ在テハ

臣民即チ被治者ノ方面ヨリ立言シ是レニ在テハ國家即チ治者ノ方面ヨリ立言シ彼レニ在テハ法律ノ定ムル所ハ裁判官ノ資格ニ關シ本條ハ汎ク裁判權實行ノ標準タルベキ法規ニ關スルノ差アルノミ要スルニ裁判權實行ニ關スル事ハ必ス法律ニ依テ定マレル形式手續ニ從フベク命令ヲ以テ侵スコトヲ得サルノ主義ヲ保障シタルモノナリ

司法權ヲ行フ者ハ裁判所ナリ汎ク裁判所ト稱スルヲ以テ行政裁判所ヲモ含ムカ如クナルモ後チノ第六十一條ト對照スルトキハ其然ラザルコトヲ知ルベシ司法權ノ實行ヲ裁判所ナル特定ノ官府ニ委テ行政官ヲシテ之レニ當ラシメサルハ司法行政トノ區域ヲ分畫スルト共ニ臣民ノ權利自由ヲ貴重スル所以ナリ

普通裁判所分ツテ民事及刑事ノ二種トス刑事ハ刑罰法ノ適用ヲ司

トリ民事ハ權利義務ノ訴訟ヲ斷スル所タリ共ニ臣民身体財産自由榮譽ニ關スル至大ノ職權ヲ行フモノナルヲ以テ其構成ハ必ス法律ヲ以テ定ムベキト本條ノ保障スル所ナリ而シテ本條ニ基キ制定セラレタル現行法ハ明治二十三年法律第六號裁判所構成法是レナリ

第五十八條

裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル

者ヲ以テ之ニ任ス

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其

ノ職ヲ免セラハコトナシ

懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

本條ハ裁判官ノ地位ノ安因ヲ保障スルノ成文ナリ

夫レ文武官ノ任免ハ天皇ノ大權ニ專屬シ而テ裁判官モ亦文官ノ一種ナレバ其之ヲ任免スルノ權天皇ニ在ルヤ言ヲ嫉マス然ルニ如何

ナル要件ヲ具フル者ヲ以テ裁判官トスルヤ換言スレバ裁判官タルノ資格ハ本條之ヲ法律ノ定ムル所ニ委子タリ抑々裁判官ハ法律ヲ主持シ刑事ニ在テハ罪ノ有無ヲ斷シ民事ニ在テハ權義ノ存否ヲ決シ臣民ノ倚テ以テ權利財産ヲ託スルハ實ニ其法律上相當ノ資格アルニ賴ラスンハアラス是レ本條ニ於テ裁判官タル資格ハ法律ヲ以テ定ムヘキコトヲ保障シタル所以ナリ

裁判官ヲシテ公平不偏ノ實ヲ保タシメント欲セバ威權ノ干涉ヲ離レ不羈獨立ノ地位ヲ得セシメサル可ラス是ヲ以テ本條ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由リ罷免セラル、ノ外終生其地位ヲ失ハサラシム而シテ其懲戒處分ヲ行フニ就テモ其標準タルヘキ法規ハ必ス法律ニ依ルヘク命令ヲ以テ之レニ臨ムコトナカラシム是又裁判官ノ地位ヲ鞏固ニスル所以ニ外ナラス

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

對審トハ豫審ニ對スル用語ニシテ猶ホ公判ト言フカ如シ公開トハ廣ク公衆ノ傍聽ヲ許スヲ言フ抑裁判ノ事タル前ニモ一言シタルカ如ク刑事ニ在テハ罪ノ有無ヲ斷シ民事ニ在テハ權利ノ存否ヲ決スルモノニシテ個人ノ權利自由ハ舉テ裁判官ノ掌中ニ在リト言フモ不可ナキナリ是ヲ以テ憲法及法律ハ種々ノ規定ヲ設ケ或ハ其官ヲ終身トシ或ハ其地位ヲ獨立不羈トシ或ハ其資格要件ヲ嚴ニシ裁判官ヲシテ毎ニ公大正明ナラシメンヨトヲ期望セリ然レトモ若シ其裁判ヲ秘密ニスルニ於テハ偏頗好曲ノ其間ニ行ハル、ナキヲ保セ

ス本條ノ規定アルハ蓋シ之レガ爲メナリ
右ハ本則ナリト雖モ裁判スベキ事項ニシテ安寧秩序ヲ害スルノ虞アル場合例ヘハ内亂外患ニ關スル諸種ノ犯罪及ヒ凶徒嘯聚罪等動モスレハ甚シク世情人心ヲ刺衝シ不穩ノ舉動ヲ誘發スルモノ又ハ姦淫離婚等其係爭事實ヲ世間ニ暴露スルニ於テハ爲メニ一般ノ風紀ヲ紊ルノ虞アル場合ニハ例外トシテ本條保障ノ外ニ置クモノトス是レ他ナシ此ノ如キ場合ニハ公開スル事ニ因テ得ルノ利益ハ之レニ因テ招クベキ損害ヲ償フニ足ラサレハナリ
此公開ヲ停ムルニ二個ノ場合アリ法律ニ規定アルモノ及ヒ裁判所決議ニ因ルモノ是レナリ法律ノ規定ニ因ルモノハ事件ノ性質自身ニ於テ毎ニ本條ノ豫想スル如キ危險アルベキ事情ノ伴隨スルモノニシテ前ニ舉ケタル内亂外患ニ關スル諸種ノ犯罪ノ如キ多クハ之

レニ屬ス(裁判所構成法第五條乃至第一百十條ノ如キ參照)
裁判所ノ決議ニ因リ公開ヲ停ムルモノハ法律ノ豫定セサルモノニ
シテ時ノ事情ト事件ノ模様トヲ察シ其必要ヲ認ムルモノ是レナリ
而シテ其何レノ場合タルヲ問ハス言渡ハ必ス公開スベキモノトス
他ナシ裁判ノ言渡ノミニ止マル場合ヲ以テ審理中兩造互ニ辨舌ヲ
弄シ證據ヲ説明スル如キニ比スレハ公安秩序ヲ害シ風紀ヲ紊ルノ
度極メテ僅少ナレハナリ

第六十條 特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ

法律ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所構成法ノ規定ニ依レハ區裁判所、地方裁判所、控訴院及大審院
ヲ通常裁判所トス特別裁判所ト通常裁判所ニ對スル稱呼ニシテ我
國現今ノ制度ニ於テハ陸海軍々法會議、懲戒裁判所、海員審所、特許局

審判所等是レニ屬ス是等ノ裁判所モ亦本條ノ保障ニ依リ法律ヲ以
テ規定セラルベク命令ヲ以テ法律ノ除外例ヲ設クルコトヲ得サル
ナリ右ノ外將來商工裁判所ヲ設クルニ至ラハ又是特別裁判所ニ屬
スベシ英國ノ如キハ特別裁判所ノ數甚タ多ク破産裁判所、負債裁判
所及離婚裁判所等ノ設ケアリ各特種ノ事件ヲ管轄審理セリ

第六十一條 行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害

セラレタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定
メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁
判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラス

本條ハ行政裁判所、司法裁判所トノ管轄ヲ定メタルモノナリ
抑司法裁判所ノ權限ハ概括主義ニシテ民事及刑事ノ全体ヲ管轄裁
判スレトモ行政裁判法ハ概括的列記ノ主義ヲ採リ法律勅令ニ於テ

特ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ト爲シタルモノニ限り管轄ス
明治二十三年十月法律第六號ハ規定シテ曰ク法律勅令ニ別段ノ
規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由
リ權利ヲ毀損セラレタル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ
得

一、海關稅ヲ除ク外租稅及手数料ノ賦課ニ關スル事件

二、租稅滯納處分ニ關スル事件

三、營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四、水利及土木ニ關スル事件

五、土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件

右列記中ノ事項ハ概括的ナリ即チ一號中ニ屬スル種類ノ事件ハ總
テ行政訴訟ヲ許スナリ此他市制第八條第二項同第百十八條同第百

廿四條町村制第五條第三十七條第三項第六十八條第二項第百廿二
條第二項府縣制第十四條第二項第六十九條郡制第十五條第二項第
七十五條等ニ於テ明文ヲ掲ケ出訴ヲ許シタリ

司法裁判所ノ外ニ於テ特ニ行政裁判所ナルモノヲ設ケ一定ノ事件
ニ限り其管轄ニ委スルノ必要アリヤ否ヤハ大ニ議論ノ存スル所ニ
シテ我邦ニ於テハ明治二十三年始メテ行政裁判所ノ發布施行セラ
レ而シテ此制度ヲ設ケタル理由ハ要スルニ行政裁判所ノ管轄スベ
キ事項ハ通常民刑ノ訴訟ト異ナリ當事者ノ一方ハ常ニ國家ノ機關
タル官廳ニシテ係爭事實ハ行政處分ノ當否ニ在ルガ故ニ審理判決
ニハ特別ノ手續ヲ要シ裁判官モ亦行政上特別ノ智識ヲ具フルヲ要
ストノ事ニ外ナラス

本條ハ行政裁判所ノ裁判ニ屬スベキモノハ司法裁判所ニ於テ受理

スルノ限リニ在ラスト言ヒ行政裁判所ノ裁判ニ屬セサルモノハ悉ク司法裁判所ニ於テ受理スベシト言ハス而シテ司法裁判所ノ權限ハ構成法ノ規定ニ依リ民事及刑事ニ限ルガ故ニ法律勅令中行政裁判所ニ屬スベキ明文ナク而モ其性質民事及刑事ニ屬セサルモノハ如何スベキヤハ曾テ學者及執法官ノ間ニ議論喧シガリシ處ナリ若シ司法裁判所ハ行政裁判所ノ裁判ニ屬セサル總テノ事件ヲ管轄スルモノトスレハ民事及刑事ノ外向特權ノ事件ヲ管轄スルコトナリ構成法ノ規定セル權限ヲ擴張スルノ結果ヲ生ス若又民刑事事件ノ外管轄セストスルトキハ一定ノ事項ハ其性質民事刑事ニ屬セサルカ爲メ司法裁判所ニ訴フルニ由ナリ又特別ノ規定ナキ爲メ行政裁判所ニ訴フルヲ得ス權利アレトモ救濟ヲ求ムルニ所ナキノ奇觀ヲ呈スベシ然レモ這ハ法制未タ完備セサルノ致ス所ニシテ我邦現今ノ

制度トシテハ後段ノ見解ヲ以テ解釋上當ヲ得タルモノト爲サ、ル可ラス

第六章 會計

本章ハ國家ノ歲入歲出ニ關スル規定ニシテ第六十二條ヨリ第七十二條ニ至ル十一ヶ條ヨリ成リ之ヲ分解スレハ租稅ノ賦課其他ノ收納ニ關スル規定國債及ヒ國庫ノ負擔トナルヘキ契約締結ノ規定豫算ニ關スル規定決算ニ關スル規定トス凡テ國家ノ事務ハ一トシテ其費用ヲ要セサルモノナク然カモ國家ハ之ヲ供給スベキノ資産ヲ有セサレバ國家ヲ組織スル各臣民ハ國家ノ公費ヲ分擔セザルヘカテザルハ當然ニシテ必スシモ權利財産ノ安全ヲ保護セラル、報償トシテ支拂フモノニ非ルナリ會計ハ此收入支出

ヲ整理スル行政ノ要部ニシテ臣民ノ生活ト至密ノ關係ヲ有スルヲ以テ憲法ハ「特ニ此一章ヲ設クテ會計ニ關スル規定ヲ慎重ニセラレタリ」(本章ヲ講究スル者ハ宜シク明治廿二年法律第四號會計法勅令第六十號會計規則ニ據リ其大体ヲ知り諸種ノ特別會計法其他ノ規定ニ據テ歲入歲出ニ關スル政府ノ處分手續ノ詳細ヲ知ルヘシ)

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス

國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協賛ヲ經

ヘシ

本條ハ租稅ノ賦課其他ノ收納金ニ關スル規定ト國債ヲ起シ及ヒ國庫ノ負擔トナルヘキ契約締結ノ規定ヨリ成ル

土地ニ課スルモノ之ヲ租トシ財産所得營業賣品契約等ニ課スルモノ之ヲ稅トス稅率トハ此租稅ノ割合ト云フノ義ナリ新ニ租稅ヲ課スルトハ新稅源ヲ設クルコトニシテ例ヘハ明治二十年所得稅法ヲ發布シテ從來徵稅ノ基本ヲラザリシ所得ニ對シ新タニ課稅スルコトヲ定メタル場合ノ如シ稅率ノ變更ハ從來課シ來リタル租稅ノ割合ヲ變更スルモノニシテ例ヘハ地租ヲ輕減シ酒造稅ヲ加増スルガ如キモノナリ是等ノ場合ハ總テ帝國議會ノ協賛ヲ經タル法律ヲ以テ定ムヘキモノトス夫レ新タニ租稅ヲ課シ又ハ稅率ヲ變更スルコトハ臣民生活ノ要タル財産ニ直接ノ關係ヲ有スル至大ナルヲ以テ憲法

發布前ト雖モ之ヲ元老院ノ議ニ附シ以テ其手續ヲ慎重ニセラレタ
レドモ其議決ハ必スシモ政府ノ遵守スヘキ義務アルニ非ズ修正ヲ
願ミズシテ發布スルコトヲ得タリシナリ然ルニ本條ニ於テハ必ズ
法律ニ依ルヘキ旨ヲ明定シテ以テ臣民ハ其代表者タル議會ノ協賛
ヲ經タル法律ニ依ルニ非レバ從前ヨリ多額ノ負擔ヲナスニ及ハサ
ルノ保証ヲ與ヘラレタリ是レ此憲法ニ依リ臣民ニ與ヘラレタル權
利ノ最大ナルモノ、一トス
報償ニ屬スル行政上ノ手数料トハ各種ノ鑑札料免許料等ノ如キモ
ノニシテ特ニ之ヲ納ムル個人ノ利益ノ爲メ國家ガ爲シタル事務ノ
報償ナリ又其ノ他ノ收納金トハ官立學校ノ授業料郵便電信ノ切手
及鐵道ノ賃金ノ如キモノニシテ元來個人ニ於テモ爲シ得ヘキ事業
ヲ經濟便宜等ノ理由ヨリ國家ニ於テ爲ス事業ニ對シ各個人ガ其希

望ニ依リ特別ノ利益ヲ得タル報償トシテ納ムルモノナレバ之ヲ掌
ル行政官廳ニ於テ其割合ヲ定ムルハ相當ニシテ便利ナルヲ以テ之
ヲ法律ニ於テ定メザルヘシ然レドモ本條特ニ行政上ノ手数料ニ限
リ司法上ノ手数料ヲ除キタルモノハ其性質ニ於テハ同ヲ行政上
ノモノニ異ナラスト雖モ亦裁判登記ノ如キハ一般臣民ガ憲法ニ於
テ確保セラレタル權利ノ安全ヲ得ルモノニテ其利益ヲ得ルハ特殊
ノ人ニ限ラザルヲ以テ宜シク法律ニ於テ之ヲ定ムヘキモノトセラ
レタリ

國債ハ軍事公債、整理公債其他如何ナル目的名稱ヲ以テスルモ又之
レヲ內國ニ於テ募集スルモ外國ニ於テスルモ同シク國家ノ負債ナ
レバ之ヲ起スハ宜シク帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ何トナレバ國家ノ
負債ハ賦政上重要ナル事項ニシテ其結果臣民ノ負擔ヲ増加スルモ

ノナレバ第一項ノ主意ト同ク必ズ議會ノ協賛ヲ要スルナリ國庫ノ負擔ト爲ルヘキ契約トハ國家ガ或ル特定ノ人ニ對シテ財産ニ關スル義務ヲ負擔スヘキ民法上ノ契約ニシテ外國トノ條約ノ如キハ天皇ノ大權ニ屬スルモノナレバ之ニ包含セス然レモ國庫ノ負擔ト爲ルヘキ契約ト雖モ毎年要スル所ノ額ヲ定知スヘキモノハ必ズ豫算ニ於テ之ヲ定ムヘキヲ以テ本條ニハ豫算ニ定メサル契約即チ年々支出ノ額ヲ一定シ難ク豫算ニ定ムル能ハサルノ契約ヲ規定シ豫シメ帝國議會ノ協賛ヲ受ケテ契約ヲ締結スヘキコト、セラレタリ此種ノ契約ハ民間ノ事業ニシテ公共ノ利益ト爲ルヘキモノヲ保護スル爲メニ締結スル契約例ヘハ鐵道會社商船會社私立又ハ公立學校ニ對スル補助金利子保証金ノ如キモノ是レナリ

第六十三條 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メ

サル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

本條ハ前條第一項ニ於テ新稅ヲ課シ又ハ稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘキコトヲ規定セラレタルガ故之ニ對シテ此憲法發布ノ當初ニ於テ現行ノ租稅タリシモノハ依然舊ニ依リ徵收スルコトヲ規定シ併セテ將來法律ヲ以テ之ヲ改メサル限リハ永ク其効力アリトセラレタルモノナリ蓋シ歐州ニ於テハ歷史上ノ關係ヨリシテ租稅ハ年々議會ニ於テ豫算ノ他ノ部ト共ニ議定スルコト、定メタル國アリト雖モ此ノ如キハ徒ラニ紛雜煩冗ヲ極ルノミニシテ實際ニ必要ナキノミナラズ國家存立ノ常久不動タル所以ヲ傷クルモノナルヲ以テ我憲法ニ於テハ之ヲ許サス即チ議會ガ豫算ヲ議スルハ其稅法ヲ改議スルニ非ズシテ唯更革ヲ要スヘキ点ノミヲ議スヘク豫算ヲ以テ租稅ヲ變更スルヲ得ズ之ヲ變更セント欲セバ必ズ法

律ヲ以テセサルヘカテサルナリ

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス豫算ハ國家年々ノ支出ト收入トヲ對比シ豫シメ其額ヲ定ムルモノニシテ財政ノ秩序ヲ整理シ行政權ヲシテ其準依スル所ヲ知ラシムルニ於テ必要ナルモノトス而シテ本條ハ其豫算ハ必ず帝國議會ノ協贊ヲ經ヘキモノト規定セラレタリ然ルニ前條説明スル如ク我憲法ニ於テハ租稅ハ特ニ法律ヲ以テスルニ非レハ之ヲ改ムル能ハザルヲ以テ帝國議會ハ豫算ニ對スル協贊權アルヲ理由トシ豫算中ニ編成セラレタル法律ヲ以テ定メタル歲入ニ就キ之ヲ廢止變更スル

能ハザルハ勿論亦豫算中ニ存スルノ皇室經費憲法及ヒ法律ニ基ク歲出繼續費豫備費ノ如キモ禮マ、ニ廢止變更ヲ試ムルコト能ハサルヘシ是レ前條及ヒ第六十六條以下ニ規定セラル、所ナリ是ヲ以テ議會ノ協贊ヲ經ヘキハ豫算中政府ガ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲メ必要ト認ムル所ニ從ヒ命令ヲ發シ事業ヲ起スガ爲メニ要スル費用ノ如キモノニシテ又是等ノ費用ハ年々多少ノ變易アルヘク實際其任ニ當リ詳カニ國家内外ノ情形ニ通ズル行政部ニ於テ調製スルヲ適當トスルガ故ニ豫算ハ法律ト異ナリ議會ヨリ其案ヲ提出スルノ權ヲク唯行政部ノ提出案ニ付キ之ヲ可否修正スヘキナリ此權ハ代議政治ノ根本基礎トナルヘキ重要ナルモノニシテ能ク行政事業ヲ箝制シテ財政ノ秩序ヲ整理シ之ガ爲メ無益ニ臣民ノ財力ヲ消費スルヲナカラシムル所以ナリ

然リト雖モ國家ノ活動ハ變遷常ナラス豫算ヲ以テ定メサル支出ヲ爲スヘキ事實湧出シ又ハ豫算ニ定メラレタル費額ヲ以テセハ豫定ノ事務ヲ終ル能ハザル場合ナシトセズ此場合ニ於テハ政府ハ豫算ニ背クモ寧ロ國家必要ノ事務ヲ舉ケサルヘカラス蓋シ豫算ハ行政權ヲ行フ標準ニシテ素ヨリ尊重スヘキモノナリト雖モ亦之ヲ以テ國家ノ存立ト目的トニ換フヘカラス政府ハ憲法及法律ヲ以テ規定セル權利ヲ執行シ義務ヲ履踐スルニ於テ必要緊急ノ費用ハ豫算ニ背テ之ヲ支出スルノ權アルナリ(憲法第六十九條)必ズ豫備費ヲ設ケテ之ヲ廢止スルヲ許サ、ルハ全ク此費用ニ充テシガ爲メノミ併シ乍ラ是レ元來變例ニ屬シ苟クモ政府此權利ニ口ヲ藉リ濫リニ冗費ヲ支出スルガ如キコトアラハ豫算ヲ以テ必ズ議會ノ協賛ヲ經ベシトセル本條第一項ノ原則ハ殆ント畫餅ニ歸シ國家ノ事はヨリ紊亂

セシ故ニ是等ノ支出ハ後日帝國議會ニ提出シテ其承諾ヲ求ムヘキコトヲ規定シ以テ議會ヲシテ其處置ノ適法ナルヤ否ヤヲ監視セシメ行政部ヲシテ大ニ責任ヲ負ハシメ專擅ノ處爲ナカラシメントセリ之ヲ事後承諾ト云フ

第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

衆議院貴族院共ニ帝國議會ノ一部ニシテ政府ガ法律案ヲ帝國議會ニ附シテ議定セシムルハ之ヲ何レニ先ニ提出スルモ可ナリ然ルニ特ニ豫算ニ限り前ニ衆議院ニ提出スヘキコトヲ定メラレタルハ他ナシ衆議院ハ全ク國民一般ノ公選ニ成リ國民ヲ代表スルノ性質ニ於テ貴族院ト其度ヲ異ニス豫算ノコトタル臣民ノ生計ト直接ノ關係ヲ有シ其臣民ノ資力如何ヲ熟知スルハ衆議院ナルヘキヲ以テ先ツ之ニ提出シテ議決セシメ然ル後貴族院ノ議ニ附セハ貴族院ハ多

少衆議院ノ議決ヲ敬重スヘク且政府財政上ノ須要ト臣民生計上ノ度合ト相對照シテ貴族院ノ觀察ヲ俟ツノ理アリ之ヲ以テ歐州諸國ニ於テモ亦豫算ハ必ズ前ニ衆議院ニ提出スルコト、定メアリ之ヲ豫算先議權ト云フ然レモ是レ單ニ提出ノ順序ヲ定メタルモノニシテ之ヲ可否修正スルノ權ニ於テハ決シテ兩院ノ間ニ區別アラザルナリ

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協贊ヲ要セス

本條ハ第六十四條ニ於テ豫算ハ必ズ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシト定メタル原則ニ對シ其例外ヲ規定シタルモノナリ夫レ皇室經費ハ天皇ガ國家ノ元首トシテ要スル經費ニシテ帝室ノ尊嚴ヲ保チ國家統

治ノ基礎ヲ固フスルニ缺クヘカラサルモノナレバ國庫ヨリ之ヲ奉呈スルハ國費中最先最重ノ義務ニ屬ス若此經費ニ對シ一々議會ノ容喙ヲ許シ調査取捨スルヲ得ヘシトセバ帝室ノ威嚴ヲ損シ皇室ニ對スル敬禮ヲ失スルニ至ルヲ以テ其使用ニ對シテハ一ニ宮廷ノ事ニ係リ議會ノ承諾及検査ヲ要セザルコト、セラレタリ宮内省ノ經費ハ此内ニ屬スルヲ以テ豫算中特ニ宮内省ノ爲メニ欄ヲ設ケス此故ニ豫算ハ國庫歲出ノ總額ヲ示サンガ爲メ皇室經費ヲ其内ニ掲ケルモ此部分ニ對シテハ議會ノ協贊ヲ經ルヲ要セサルナリ然レモ將來増額ヲ要スル場合ニ於テハ臣民ノ負擔ニ關係ヲ及ホスヲ以テ議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ定メラルヘシ而シテ現在ノ定額トハ此憲法發布ノ當時ニ於ケル皇室費三百萬圓ヲ指シタルモノナリ

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出及

法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル
歳出ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又
ハ削減スルユトヲ得ス

本條モ亦前條ト同シク議會ノ豫算ニ對スル協贊權ノ例外ヲ定メタルモノナリ之ヲ憲法上ノ大權ニ基ク既定ノ歳出及法律ノ結果ニ由ル歳出法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出トス是等ノ歳出ハ政府ノ同意ヲ得サレバ議會擅ニ廢除又ハ削減スルコトヲ得サルナリ抑モ憲法上ノ大權トハ第一章ニ規定セラレタル天皇ノ大權ニシテ文武官ノ官制及俸給ヲ定メ及之ヲ任免スルヲ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ムルヲ外國ト條約ヲ締結スルヲ爵位勳章其他ノ榮典ヲ授與スルヲ等ニシテ既定ノ歳出トハ此等ニ關スル費用ニシテ一旦經常費額ト定マリタル歳出トノ意ナリ本條ハ憲法發布以來大問題トナリ其

包容スル所何レリ迄及ボスヤニ就テ議論噴々タリシガ遂ニ明治廿三年八月法律第五十七號ヲ以テ會計法補則ヲ發布シ其第一條ニ於テ左ノ如ク規定セラレタリ日ク明治廿三年度歳出豫算中左ノ費用ハ明治廿四年度ノ豫算ニ於テ憲法第六十七條ニ規定シタル大權ニ基ケル既定ノ歳出トス

- 一 文武官ノ俸給及文官退官賜金
- 二 陸海軍々事費憲兵費屯田兵費
- 三 賞勳年金及褒賞費
- 四 外國條約及約束ニ依レル支出
- 五 各廳ノ廳費及經常修繕費

故ニ廿四年度ニ於テ既定歳出タリシモノハ廿五年度ニ對シテ既定歳出トナリ又廿五年度ニ於テ既定歳出タリシモノハ廿六年度ニ對

シテ既定歳出トナルベシ但シ大權ニ基ク歳出ト雖モ新置及増置ノモノハ既定ノ歳出ト云フヘカラザルヲ以テ第六十四條ノ原則ニ從ヒ議會ノ協賛ヲ經ルハ勿論ナリ而シテ法律ノ結果ニ由ル歳出トハ法律ノ正條ニ於テ別ニ歳出ノコトヲ明示セスト雖モ其法律ガ規定スル所ノ事務ヲ執行スルニ必要缺クベカラザル費用ニシテ帝國議會經費裁判所并會計検査院經費、徴兵費、徴稅費、備荒儲蓄、恩給扶助料、恩賞及救助費ノ如シ是亦會計法補則第二條ニ於テ規定スル所ナリ又法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出トハ法律ノ明文上必ズ國庫ノ負擔タルヘキコトヲ明定セサルモノニテ若シ之ヲ裁判ニ付セバ則チ政府ノ義務タルヘキコトヲ言渡サルヘキ性質ノモノナリ公債ノ償還及利子、會社、病院、學校等ニ付與スベキ補助又ハ利子保証、雇外國人ノ俸給、法律上ノ賠償及訴訟費、預金、利子、地方公共ノ工事費補助ノ如キ

ハ法律上政府ノ義務ニ屬スルモノ是亦會計法補則第三條ニ於テ明治廿四年度歳出豫算中此種ノ義務ヲ列舉セリ以上説明スル如ク此三種ノ歳出ハ憲法及法律ノ規定ヨリ當然生スベキ費用ニシテ議會ハ擅ニ之ヲ廢除削減スルコトヲ得ズ何トナレバ豫算ハ法律ニ非ズ豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ許サ、レバナリ若シ此種ノ歳出ヲ擅ニ廢除削減シ得ベシトセバ行政及財務ノ準據スベキ憲法及法律ヲ蔑視スルモノニシテ國家ノ組織秩序ハ其目的ヲ全フスル能ハザルニ至レバナリ然レモ若シ政府ノ同意ヲ得ルニ於テハ法律及時宜ノ許ス限リ之ヲ省畧修正スルコトヲ得ルハ勿論ナリ

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルコトヲ得繼續費トハ一ノ事業ニ對シ數年度ニ亘リテ支出ヲ要スル費用ナリ

凡ソ國家ノ事務ハ常ニ活動變遷スベキモノナルヲ以テ豫算ハ一年毎ニ之ヲ調製シ毎年之ヲ議定スルヲ以テ原則トス然レモ亦多種ノ事業中一年ニシテ之ヲ了ル能ハス數年ヲ期シテ初メテ其成功ヲ見ルヘキモノアリ陸海軍費ノ一部又ハ工事製造ノ類是レナリ若シ之ヲシモ毎年議定スルコト、セシカ當初一年ノ可決ニ依リ之ニ着手スルモ次年ニ至リ廢除削減セラル、時ハ其事業ハ中途ニシテ廢止シ又ハ規模ヲ更メサルヲ得サルニ至リ國家ノ損害知ルヘカラス故ニ此ノ如キ特別ノ須要アル時ハ政府ハ豫メ年限ヲ定メテ繼續費トナシ其初年ニ於テ議會ノ協賛ヲ求メ得ベシト規定セラレタルナリ而シテ議會ガ一旦之ヲ議決スルヤ其効力ハ豫定ノ年限ニ及ビ爾後毎年之ヲ豫算中ニ掲クルモ議會ハ之ヲ廢除削減スルヲ得サルナリ而シテ其全額ハ數年ニ均分スルモ又事業ノ都合ニ依リ年々ノ支出

額ヲ異ニスルモ敢テ憲法ノ禁セサル所ナリ是ヲ以テ本條ハ第六十四條ノ國家ノ歳入歳出ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシトセル原則ニ對シ一ノ例外タルモノナリ

第六十九條 避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ豫備費ヲ設クヘシ

本條ニ亦議會ノ豫算協賛權ニ對スル一例外ニシテ第二十四條二項ニ於テ説明シタル如ク政府ノ事業ハ豫算ニ於テ定メタル額ヲ以テハ到底其結了ヲ期スベカラサルコトアリ又時トシテハ豫算ニ於テ設ケタル款項ノ外ニ豫見セサルノ事項生スルコトモアルベシ此場合ニ於テ政府ハ豫算ノ爲メニ其事務ヲ廢止スルヲ得ザレバ豫算中ニハ必ズ豫備費ヲ設ケテ之ニ應スルノ必要アリ是レ本條ノ規定ア

ル所以ニシテ議會ハ其額ヲ削減スルヲ得ベシト雖モ全然之ヲ廢除スルヲ得ザルナリ然レモ避クベカラザル豫算ノ不足トハ豫算案編成ノ時ニ於テ豫期セザリシ必要ノ分ニシテ豫算外ニ生シタル必要ノ費目ト云フモ同シク豫算案編成ノ當時豫知シ得ザリシモノナルベキヲ以テ一旦豫算案ニ載セタルヲ議會ニ於テ特ニ廢除削減シタルモノハ如キハ之ヲ必要避クベカラザルモノト云フ能ハサルヲ以テ豫備費中ヨリ支出スヘカラサルノ意ナルベシ

第七十條 公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

本條ハ第八條ノ場合ヲ會計ニ應用シタル規定ニシテ公共ノ安全ヲ保持スル爲メ緊急ノ需用アル場合例ヘバ内亂又ハ外患等アリテ敏速ニ之レガ處分ヲ爲スニ非ルハ公共ノ安全ヲ保持シ難キ場合ハ議會ノ協賛ヲ經ズシテ特ニ勅令ヲ以テ財政上必要ノ處分ヲ爲シ得ルモノナリ而シテ財政上必要ノ處分トハ新稅ヲ起シ又ハ增稅ヲ爲シ或ハ國債ヲ起シ紙幣ヲ發行スル等ノ處分ヲ云フ左レハ本條ハ第六十二條ニ對スル例外ノ規定トモ看ルヘキカ然レモ財政ノ事ハ直接ニ臣民ノ財産ニ關スルコト重大ナルヲ以テ一層ノ慎重ヲ要シ第八條ニ規定セラレタル要件ノ外尙内外ノ情形ニ因リ帝國議會ヲ召集スルコト能ハザルトキト云フノ一條件ヲ加ヘテレタリ夫レ國家臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テハ政府ハ帝國議會ノ臨時會ヲ召集ス

ルコトヲ得ルハ第四十三條ノ規定スル所ナレバ假令緊急ノ需用アルモ苟クモ臨時議會ヲ召集シ能フニ於テハ必ズ之ヲ召集シテ其協賛ヲ經タル上財政上ノ處分ヲ爲スコトヲ要シ萬一國家内外ノ情形ヨリシテ議會ヲ召集スル途ナキモ若クハ内地各所ノ騷亂等ニ依リ到底議會ヲ召集スル途ナキ等ノ場合ニ於テ初メテ本條ニ據ルヲ得ベシトセラレタリ故ニ政府ガ本條ノ處分ヲ爲シ得ル場合ハ第一ニ緊急止ムベカラザル需用アルコト第二ニ其緊急ノ需用ハ公共ノ安寧ヲ保持スル爲メナルコト第三ニ帝國議會ノ閉會中ナルコトノ三要件ノ外尙内外ノ情形ニ因リ臨時議會ヲ召集スル能ハサル場合ナルヲ要ス夫レ然リ政府ニシテ既ニ此臨時處分ヲ爲シ得ルトセバ從ツテ口ヲ之ニ藉リ妄ニ此權ヲ用フルノ虞ナキニ非ルヲ以テ是亦第八條ト同ク次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ其承諾ヲ求ムベキコト

ヲ定メ以テ議會ヲシテ之ヲ監督セシムルノ道ヲ設ケタリ但シ後日議會ニ於テ之ヲ承諾セサルコトアルモ其効果ハ唯其處分ヲ將來ニ續行スルコトヲ得サラシムルニ止マリ己ニ行ヒタル過去ノ處分ヲ追廢スルモノニ非ルハ他ノ總テノ事後承諾ニ同ク

第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

豫算ヲ議定セストハ議會自カラ議定ノ局ヲ結ハズシテ閉會スル場合ヲ云フ抑モ議會ハ政府ヨリ提出シタル豫算ヲ議セサルヲ得ルヤ否ヤハ一ノ問題トシテ説明スルノ價值アルモ本條ノ解釋ニ就テハ其要ナキモノトス何トナレバ本條規定スル所ハ議會ノ故意ナルト無意ナルトニ論ナク其會期中ニ於テ議定セス閉會シタル場合ハ皆

豫算ヲ議定セスノ文字中ニ包含スベキヲ以テナリ又之ヲ議セザルニ非ルモ兩院ノ意見一致セスシテ協議會ヲ開キ其協議未ダ整ハサル内早ク閉會ニ至リシ場合モ亦同シ而シテ豫算成立ニ至ラザルトキハ兩院ノ一ニ於テ豫算案ヲ廢棄シタルト又ハ豫算議決前ニ停會解散ヲ命セラレタル場合等ニシテ廣ク之ヲ解釋スレバ議會ニ於テ豫算ヲ議定セサル場合モ亦同シク豫算ノ不成立ニ至リタルモノナリ之ヲ何レニスルモ來ル會計年度ニ於テ政府ノ準依スベキ豫算カ其年度ノ初メ迄ニ成立セザリシ場合ヲ云フ此ノ如キハ我國ニ於テモ先例アリ又外國ニモ屢々起ル所ノ場合ニシテ我憲法ノ如キ規定ナキ爲メ甚シキハ數月間兵士ノ給養ヲ欲キタル事例アリト云ヒ然ラサルモ此場合ニ於テハ政府ノ專意ヲ以テ財務ヲ施行シタルコトアリ眞ニ國家ノ存立ヲ害シ立憲ノ旨趣ニ背クモノト云フベシ夫レ

是等ノ場合ニ遭過シテ國家ノ財務ハ一モ之ヲ行フコトヲ得ストセハ其結果行政機關ノ運轉ハ茲ニ全ク停止セラレテ國家ノ存立ヲ廢絶スルニ至ルベク又之ヲ政府ノ自由ニ一任シテ隨意ニ收支ヲ爲ストヲ得ルトモハ其弊ヤ極ル所ヲ知ラス豫算ニ關スル本章ノ規定ハ毫モ其効ナキニ至ラン之ヲ以テ本條ハ此場合ニ處シ政府ハ前年度ノ豫算ヲ以テ其年度ノ豫算ト爲シ之ヲ施行スヘキコトヲ定メタリ固ニ此變狀ニ處スル適宜ノ制トス此場合ハ數年繼續スルモ同一ノ規定ニシテ異ナル所ナシ何トナレバ甲年度ノ豫算ヲ以テ施行シタル乙年度ノ豫算ハ丙年度ニ於テハ之ヲ前年度即チ乙年度ノ豫算ト云フヲ得ベク之ヲ施行シタル丙年度ノ豫算ハ丁年度ヨリ見レバ亦前年度ノ豫算ナレバナリ

第七十二條 國家ノ歲出歲入ノ決算ハ會計検査院之

ヲ検査確定シ政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

會計検査院ハ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

本條ハ豫算ト共ニ會計ノ始終ヲ爲ス所以ノ決算ニ關スル規定ナリ
決算ハ即チ總計算ト云フノ意味ニシテ若シ之ニ關スル規定ナキ時
ハ國家ノ歳入歳出ハ果シテ豫算ニ基キ又法律命令ニ違反セザルヤ
否ヤ其收支當レルヤ否ヲ知ルコト能ハズ議會ノ豫算協贊權ハ其財
政監督ノ旨趣ヲ完フスル能ハサルヘシ之ヲ以テ本條ハ國家ノ歳入
歳入ノ決算ハ會計權検査院之ヲ検査確定スルコト及ヒ政府ハ會計檢
査院ノ検査報告ト俱ニ決算ヲ帝國議會ニ對シテ提出スベキコト、
定メラレタリ而シテ會計検査院ノ検査ハ先ツ其決算ノ算數上ノ當
否ヲ明カニシ次ニ處分上ノ當否ヲ明カニスヘシ即チ歳入歳入ノ豫

算ノ款項ニ違ハサルヤ豫算超過豫算外ノ支出法律命令ニ違反セザ
ルヤ否ヤヲ糾スヲ云フ然ル後之ヲ確定シテ報告書ヲ造リ政府ハ此
報告書ヲ添ヘテ決算ヲ議會ニ提出ス議會之ヲ受ケテ自カラ審査ヲ
爲シ其正當ナルコトヲ承認スレバ之ヲ以テ會計上ノ整理初メテ全
キヲ得テ完結ス若シ之ヲ不當ナリトシテ承認セザランカ別ニ法律
上ノ處置ヲ定メザルモ議會ハ其權ニ依テ建議上奏ノ途アリ政府ヲ
シテ責任ヲ負ハシムル政治上ノ問題ト爲ルベシ

此ノ如ク會計検査院ノ性質ハ政府ノ一部トシテ内閣ノ爲メニ決決
ヲ検査スルノ地位ニ置クベカラス帝國議會ノ決算審査ノ爲メニ準
備ノ地ヲ爲スモノナレハ内閣トハ獨立ノ資格ヲ有セザルベカラス
故ニ其組織職權ハ裁判官ト同シク法律ヲ以テ之ヲ定メ行政命令ノ
區域ノ外ニ在ル者トセリ明治廿二年法律第十五號會計検査院法是

レナリ其第一條ニ曰ク會計検査院ハ天皇ニ直隸シ國務大臣ニ對シ
獨立ノ地位ヲ有スト其組織職權ノ詳細ハ同法ニ就テ看ルベシ

第七章 補則

本章ハ憲法最終ノ條章ニシテ憲法ノ改正皇室典範ノ改正並ニ皇
室典範ノ効力攝政ニ對スル制限及ヒ法令遑由ノ義務等ニ付テ定
メラレタリ憲法ハ第七十二條ヲ最終トシ第七十三條ヨリ七十六
條マテノ規定ハ恰モ更ニ追補シタルカノ見アリト雖モ決シテ然
ルニアラス憲法欽定ノ當時ヨリ嚴然トシテ條章ヲ爲シタルモノ
ナリ極言スレバ憲法ノ前數章ニ於ケル各章ノ分類ニ合ハサルヲ
以テ之レヲ增則トナシテ混合ノ規定ヲ爲シタルニ外ナラス

第七十三條 將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要

アルトキハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付ス
ヘシ

此ノ場合ニ於テ兩議院ハ各其ノ總員三分ノ二以上
出席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席員
三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決
ヲ爲スコトヲ得ス

本條ハ憲法ハ改正スルコトヲ得ベキ旨ヲ明ニシタルニアリ抑モ憲法
ハ國家ノ大法ナリ然レモ國家ノ情態ニ追隨シテ改正變更セラルル
モノニ非ス憲法ニ依テ國家ノ安寧福利ヲ增進スルモノナリ國家ノ
現在ニ鑒ミテ憲法ヲ改正變更スルハ當然ノ事ナリト雖モ國家カ一
ノ目的ヲ有スル故ニ其目的ノ爲メニ憲法ヲ制定セシカ國家ハ終世
一ノ目的ノ外ニ出デザル可シ憲法ハ國家ノ憲法ナリト雖モ國家ハ

憲法ニ依リテ其目的ヲ發達セシムルモノナリ故ニ國家ノ目的ヲ擴張シ國家ノ生存ヲ圓滿ナラシメント欲セバ己ニ制定シタル憲法ヲ改正シテ以テ國家ヲ福利ニ導カサルヲ得ス是レテ人身ニ譬レバ國家ハ肉躰ニシテ憲法ハ心意ナリ心意ハ身体ヲ支配ス心意肉体ヲ支配シテ人生ノ圓滿アリ心意ハ向フ所ニヨリテ改變アリ國家ノ心意タル憲法モ又向フ所ニ依テ改正セラル而シテ此憲法ヲ改正スルハ憲法ノ淵源者タル天皇ノ大權ニ皈ス我憲法ハ天皇ノ親ラ之レヲ欽定シ玉ヒタルモノニシテ其改正ノ權モ亦天皇ノ親ラ掌有シ玉フ所ナリ敢テ臣民ノ紛更ヲ容レズ

本條ハ憲法發布ノ詔勅ニ宣フ所ノ將來若シ此憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼承ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之レヲ議會ニ付シ議會ハ此憲法ニ定メタル要件ニ依リ

之ヲ議決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ之レガ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルベシトノ前文ト照應ス是レ實ニ憲法ノ尊嚴ヲ保ツ所以ナリ而シテ憲法ヲ改正スルノ方法ハ天皇勅令ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付ス可ク此場合ニ於テ帝國議會ハ貴衆兩院各總員又出席議員三分ノ二以上ノ多數決ニ依ルニアラザレバ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ズ本條第二項ノ規定ニ因ルニ改正ノ議決ト在リテ天皇ハ改正スルノ善不善ヲ議會ニ諮問スルニ止マリ議會ハ議案ヲ訂正増補シテ議決スルコトヲ得サルモノナリト言ハザルヲ得ス何トナレバ訂正増補シテ議決スルルハ憲法ノ議案ハ恰モ議會ニ於テ作ルモノタルノ結果ヲ生ズレバナリ然ルニ憲法改正ノ議案ハ天皇ノ勅令ニシテ法律案ノ如ク議會ヨリモ提出スルコトヲ得ルモノニアラザレバナリ要之本條ノ規定タルヤ憲法改正ハ法律ノ改正ト異ナルコトヲ示シ絶テ

憲法ハ尊嚴ニシテ敢テ紛更ヲ試ミルコトヲ得ザルモノタルコトヲ明定セラレタルノ法條ナリ

第四十七條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ス

本條ハ皇室典範ノ改正ニ付テ規定セラレタルモノナリ皇室典範ハ元來皇室ノ家法ニ屬シ敢テ臣民ノ容議ス可キ所ニアラス又國法ニアラザレバ直接ニ臣民ニ對シテ違由ノ効力ヲ發セザルモノナレハ國家立法ノ機關タル帝國議會ノ議ヲ經ルノ要ナキコト喋々ヲ待タスシテ明カナリ又第二項ノ規定アル一項ノ理由ヲ反省セバ自ラ瞭明ナルヲ得可シ然ルニ特ニ本條ヲ規定シタルモノハ憲法第二條第十

七條等ノ關係ヲ有スレハナリ

第七十五條 憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得ス

本條ハ憲法及皇室典範ノ變更ハ 天皇以外ノ者ノ爲ス所ニアラザルコトヲ覆明シ絶テ攝政ノ大權行用ニ對スル權能ヲ制限シタルモノナリ

憲法皇室典範ノ二法ハ國ノ元首タル 天皇ノ專有スル所ナレバ 天皇ニアラサル攝政ノ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルモノナリ實ニ本條ノ規定ハ攝政ノ憲法上ノ地位ヲ明ニスルノ一大法條ナレバ慎密周思注意ス可キノ法條ナリ

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用井タルニ拘ラス此ノ憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總

テ 遵由ノ 効力ヲ 有ス

歳出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル

本條ハ現行法令ノ効力ニ付テ規定シタルモノナリ我國未ダ立憲政体ノ組織ヲ爲サ、ル以前ニ於テハ法律ト稱スルモ或ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ス勅令命令ト稱スルモ大臣ノ副署ナキ等ノイアリト雖モ臣民ノ之レヲ遵由ス可キ所ナリトノ君命ニシテ法律命令ノ形式ニ係ハラス國家統治ノ爲メニ發セラレタル君命ハ如何ナル名稱ヲ付スルモ其實体ニ於テ憲法ト矛盾セサルモノハ尙ホ國家ノ法令ニメ總テ遵由ノ効力アルモノナリ而シテ第二項ノ規定ハ國家ノ會計ニ付テ補則シタルモノニシテ已ニ支出ニシテ政府ノ義務ニ係ル所ノ契約例ヘハ航海獎勵ノ爲メ政府ヨリ保護ヲ與ヘ年々若干ノ保護金

ヲ下賜スルコト臣民ニ契約シ又ハ道路交通ヲ計ル爲メ道路ノ開拓事業ヲ命令シ歳々幾何ノ金圓ヲ附與スル等ノ場合ニ於テ年々歳々政府ノ義務ニ係ル契約及ヒ已ニ發シタル命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ由リテ帝國議會ハ政府ノ同意ナクシテ之レヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得サルナリ終ニ注意セサル可ラサルコトアリ歳出上政府ノ義務ニ係ル契約即チ前例第一ノ場合ニ於テモ政府ノ同意ヲ得ルニ於テハ之レヲ廢除シ又ハ削減スルヲ得ルヤノコト是ナリ此場合ニ於テハ政府ハ同意シテ臣民ノ權利ヲ廢除削減シタルモノナレバ政府ハ臣民ニ對シ責任ヲ負フ可ク帝國議會ノ議決ニ對シ臣民ヨリ愕々スルコトヲ得ス換言スレバ此場合ニ於ケル帝國議會ト臣民トノ間ニ於テハ如何ナル關係ヲモ生スルモノニアラス要之本條ノ規定ハ明治憲法ノ制定ニヨリ成文憲法制定以前ノ國家ト憲法制定以後

即チ今日ノ國家ノ間ニ於テ法理的連繼ヲ絶タス日本國家ハ萬世不易ナリト言フノ意ヲ含蓄スル所ニシテ實ニ我國家ノ殊絶シタル美風ナリ

帝國憲法講義 畢

帝國憲法講義附錄

皇室典範 貴族院令
議院法 衆議院議員選舉法

即チ今日ノ國家ノ間ニ於テ法理的連繼ヲ絶タス日本國家ハ萬世不易ナリト言フノ意ヲ含蓄スル所ニシテ實ニ我國家ノ殊絶シタル美風ナリ

帝國憲法講義畢

帝國憲法講義附錄

皇室典範 貴族院令
議院法 衆議院議員選舉法

帝國憲法講義附錄

天佑ヲ享有シタル我カ日本帝國ノ寶祚ハ萬世一系歷代繼承シ以テ朕カ躬ニ至ル惟フニ祖宗肇國ノ初大憲一タヒ定マリ昭ナルコト日星ノ如シ今ノ時ニ當リ宜ク遺訓ヲ明徴ニシ皇家ノ成典ヲ制立シ以テ不基ヲ永遠ニ鞏固ニスヘシ茲ニ樞密顧問ノ諮詢ヲ經皇室典範ヲ裁定シ朕カ後嗣及子孫ヲシテ遵守スル所アラシム

御名 御璽

明治二十二年二月十一日

●皇室典範

第一章 皇位繼承

第一條 大日本國皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ繼承ス
第二條 皇位ハ皇長子ニ傳フ

第三條 皇長子在ラサルトキハ皇長孫ニ傳フ皇長子及其子孫皆在ラサルトキハ皇次子及其子孫ニ傳フ以下皆之ニ例ス

第四條 皇子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ嫡出ヲ先ニス皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ル

第五條 皇子孫皆在ラサルトキハ皇兄弟及其子孫ニ傳フ

第六條 皇兄弟及其子孫皆在ラサルトキハ皇伯叔父及其子孫ニ傳フ

第七條 皇伯叔父及其子孫皆在ラサルトキハ其以上ニ於テ最近親ノ皇族ニ傳フ

第八條 皇兄弟以上ハ同等内ニ於テ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニシ長ヲ先ニシ幼ヲ後ニス

第九條 皇嗣精神若クハ身體ノ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ前數條ニ依リ繼承ノ順序ヲ換フルコトヲ得

第二章 踐祚即位

第十條 天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

第十一條 即位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

第十二條 踐祚ノ後元號ヲ建テ一世ノ間ニ再ヒ改メサルコト明治元年ノ定制ニ從フ

第三章 成年立后立太子

第十三條 天皇及皇太子皇太孫ハ滿十八年ヲ以テ成年トス

第十四條 前條ノ外ノ皇族ハ滿二十年ヲ以テ成年トス

第十五條 儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス皇太子在ラサルトキハ儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス

ス

第十六條 皇后皇太子皇太孫ヲ立ツルトキハ詔書ヲ以テ之ヲ公布ス

第四章 敬稱

第十七條 天皇太皇太后皇太后皇后ノ敬稱ハ陛下トス

第十八條 皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王親王妃內親王王王妃女王ノ敬稱ハ殿下トス

第五章 攝政

第十九條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ攝政ヲ置ク

天皇久キニ亘ルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ攝政ヲ置ク

第二十條 攝政ハ成年ニ達シタル皇太子又ハ皇太孫之ニ任ス

第二十一條 皇太子皇太孫アラサルカ又ハ未タ成年ニ達セサルトキハ左ノ順序ニ依リ攝政ニ任ス

第一 親王及王

第二 皇后

第三 皇太后

第四 太皇太后

第五 內親王及女王

第二十二條 皇族男子ノ攝政ニ任スルハ皇位繼承ノ順序ニ從フ其女子ニ於ケル亦之ニ準ス

第二十三條 皇族女子ノ攝政ニ任スルハ其配偶アテサル者ニ限ル

第二十四條 最近親ノ皇族未タ成年ニ達セサルカ又ハ其他ノ事故ニ由リ他ノ皇族攝政ニ任シタルトキハ後來最近親ノ皇族成年ニ達シ又ハ其事故既ニ除クト雖モ皇太子及皇太孫ニ對スルノ外其任ヲ讓ルコトナシ

第二十五條 攝政又ハ攝政タルヘキ者精神若クハ身體ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ其順序ヲ換フルコトヲ得

第六章 太傅

第二十六條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ太傅ヲ置キ保育ヲ掌ラシム

第二十七條 先帝遺命ヲ以テ太傅ヲ任セサリシトキハ攝政ヨリ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ之ヲ選任ス

第二十八條 太傅ハ攝政及其子孫之ニ任スルコトヲ得ス

第二十九條 攝政ハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シタル後ニ非サレハ太傅ヲ退職セシムルコトヲ得ス

第七章 皇族

第三十條 皇族ト稱フルハ太皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王親王妃內親王王王妃女王ヲ謂フ

第三十一條 皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマテハ男ヲ親王女ヲ內親王トシ五世以下ハ男ヲ王女ヲ女王トス

第三十二條 天皇支系ヨリ入テ大統領ヲ承クルトキハ皇兄弟姉妹ノ王女王タル者ニ特ニ親王內親王ノ號ヲ宣賜ス

第三十三條 皇族ノ誕生命名婚嫁薨去ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第三十四條 皇統譜及前條ニ關ル記録ハ圖書寮ニ於テ尙藏ス

第三十五條 皇族ハ天皇之ヲ監督ス

第三十六條 攝政在任ノ時ハ前條ノ事ヲ攝行ス

第三十七條 皇族男女幼年ニシテ父ナキ者ハ宮内ノ官寮ニ命シ保育ヲ掌ラシム事宜ニ依リ天皇ハ其父母ノ選舉セル後見人ヲ認可シ又ハ之ヲ勅選スヘシ

第三十八條 皇族ノ後見人ハ成年以上ノ皇族ニ限ル

第三十九條 皇族ノ婚嫁ハ同族又ハ勅旨ニ由リ特ニ認許セラレタル華族ニ限ル

第四十條 皇族ノ婚嫁ハ勅許ニ由ル

第四十一條 皇族ノ婚嫁ヲ許可スルノ勅書ハ宮内大臣之ニ副署ス

第四十二條 皇族ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

第四十三條 皇族國疆ノ外ニ旅行セムトスルトキハ勅許ヲ請フヘシ

第四十四條 皇族女子ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ皇族ノ列ニ在ラス但シ特旨ニ依リ仍内親王女王ノ稱ヲ有セシムルコトアルヘシ

第八章 世傳御料

第四十五條 土地物件ノ世傳御料ト定メタルモノハ分割讓與スルコトヲ得ス

第四十六條 世傳御料ニ編入スル土地物件ハ樞密顧問ニ諮詢シ勅書ヲ以テ之ヲ定メ宮内大臣之ヲ公告ス

第九章 皇室經費

第四十七條 皇室諸般ノ經費ハ特ニ常額ヲ定メ國庫ヨリ支出セシム

第四十八條 皇室經費ノ豫算決算検査及其他ノ規則ハ皇室會計法ノ定ムル所ニ依ル

第十章 皇族訴訟及懲戒

第四十九條 皇族相互ノ民事ノ訴訟ハ勅旨ニ依リ宮内省ニ於テ裁判員ヲ命ジ裁判セシメ勅裁ヲ經テ之ヲ執行ス

第五十條 人民ヨリ皇族ニ對スル民事ノ訴訟ハ東京控訴院ニ於テ之ヲ裁判ス但シ皇族ハ代人ヲ以テ訴訟ニ當ラシメ自ラ訟廷ニ出ルヲ要セス

第五十一條 皇族ハ勅許ヲ得ルニ非サレハ勾引シ又ハ裁判所ニ召喚スルコトヲ得ス

第五十二條 皇族其品位ヲ辱ムルノ所行アリ又ハ皇室ニ對シ忠順ヲ缺クトキハ勅旨ヲ以テ之ヲ懲戒シ其重キ者ハ皇族特權ノ一部又ハ全部ヲ停止シ若クハ剝奪スヘシ

第五十三條 皇族蕩産ノ所行アルトキハ勅旨ヲ以テ治産ノ禁ヲ宣告シ其管財者ヲ任スヘシ

第五十四條 前二條ハ皇族會議ニ諮詢シタル後之ヲ勅裁ス

第十一章 皇族會議

第五十五條 皇族會議ハ成年以上ノ皇族男子ヲ以テ組織シ内大臣樞密院議長宮内大臣司法大臣大審院長ヲ以テ參列セシム

第五十六條 天皇ハ皇族會議ニ親臨シ又ハ皇族中ノ一員ニ命シテ議長タラシム

第十二章 補則

第五十七條 現在ノ皇族五世以下親王ノ號ヲ宣賜シタル者ハ舊ニ依ル